名古屋市
蓬左文庫

善本解題図録

第一集

名古屋市
蓬左文庫

善本解題図録

第一集

凡　例

一、本書は「名古屋市蓬左文庫善本解題図録　第一集」として、本文庫所蔵の駿河御譲り本のうちの和書三〇種（古写本二七種・古刊本三種）をおさめた。

二、駿河御譲り本は、徳川家康の駿府（静岡市）における蔵書、すなわち駿河文庫本を、元和二年（一六一六）家康の没後、その遺命により、主として尾張・紀州・水戸の三家に分譲したもので、現在、まとまったかたちで保存されているのは、蓬左文庫（尾張藩の文庫の後身。蓬左は、名古屋の別名）だけといわれる。

三、解題は、かならずしも専門家を対象とせず、一般の理解をもえられるように、簡明・平易な表現を心がけた。この点は、第二集以下も同様である。

四、排列は、歴史（有職故実を含む）・文学・仏典・漢籍注釈の順序にしたがった。漢籍注釈は、日本人の手に成り、かつ、和文を主として記されたものであるから、一応、和書としてとりあげた。

五、記載の順序は、原則として、次の項目にしたがった。

㈠　書　　名

㈡　架蔵番号（書名の下に〈　〉で記す）

㈢　編著者名

(四) 巻・冊数
(五) 刊写年代
(六) 内題・外題（題簽）
(七) 装丁・寸法
　辺・界・行数（毎半葉）・字数（毎行）・丁数
(八) 序・跋・刊記・奥書・識語
(九) 印記・伝来
(十) 内容・成立
(十一) 諸本（本文庫所蔵のものに限る。ただし、多数の場合は、その一部にとどめた。）
(十二) 参　　考

六、以上の項目中、欠けている部分は、特にことわらず、次項を記した。

七、本書は、昭和四十二年三月に刊行されたものの改訂再版である。

昭和五十五年八月

目次

歴史・有職故実

一、日本書紀神代巻……四
二、日本書紀纂疏……六
三、続日本紀……八
四、侍中群要……一〇
五、貞永式目抄……一三
六、公事根源……一五
七、重撰皇統編年合運図……一七
八、武家昇晋年譜……一八

文学・語学

九、方丈記……一九
一〇、保元物語……二三
一一、平治物語……二四

一二、沙石集……二六
一三、自然斎発句……三〇
一四、古今和歌集聞書……三二
一五、狂雲集……三三
一六、翰林葫芦集……三五
一七、聚分韻略……三六

仏典

一八、仏制比丘六物図抄……三八
一九、三教指帰……三九
二〇、聖一国師仮名法語……四一
二一、東福開山聖一国師年譜……四三
二二、勝定院殿集纂諸仏事……四四
二三、横川拈香……四五

漢籍注釈

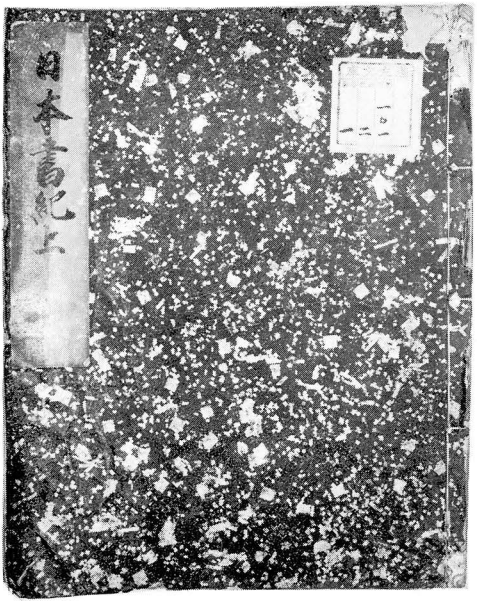
二四、毛詩抄……四七
二五、論語聴塵……四九

二六、蒙求抄……五一
二七、古文真宝抄……五三
二八、聴松和尚三体詩之抄……五四
二九、東福寺湖月和尚三体詩之抄……五六
三〇、江湖風月集抄……五八

附一　名古屋市蓬左文庫蔵書概要……六〇
附二　名古屋市蓬左文庫略年表……六三

一、日本書紀　神代巻　〈一〇一―一〉

舎人親王等編
二巻・二冊
慶長一四年（一六〇九）写・卜部兼見筆
内題「日本書紀巻第一（二）」
外題「日本書紀上（下）」
袋綴じ・紺地に金箔ちらし紙表紙（原装）
二九・五×二三・四糎
四周単辺・無界・七行・一二字（注双行）・ヲコト点・訓点付き
上巻　七三丁　下巻　六七丁
奥書　神代上下巻依大久保石見守長安厳命以累家秘本令書写之同加朱墨両点訖猥莫許外見矣
慶長己酉季夏吉曜日
神祇管領長上従二位　卜部朝臣兼見（朱印）
「御本」印記



表紙

わが国最古の官撰の歴史『日本書紀』（養老四年〈七二〇〉成立）の第一・二巻にあたり、国造りの神話や伝説などを記している。

編者の舎人（とねり）親王（六七六―七三五）は、天武天皇（六八六没）の第三子。ほかに「古事記」の編者として名高い太安万侶など十余名が参加している。

ヲコト点は、漢文訓読の際、その文字の上下・四隅に符号（点や線）を付けて、読み方を示したもの

で、中世から近世の初めにかけて行なわれた。

○諸本（本文庫所蔵本に限る。以下、同じ）

日本書紀神代巻　二巻二冊　江戸中期写　〈三―五〉

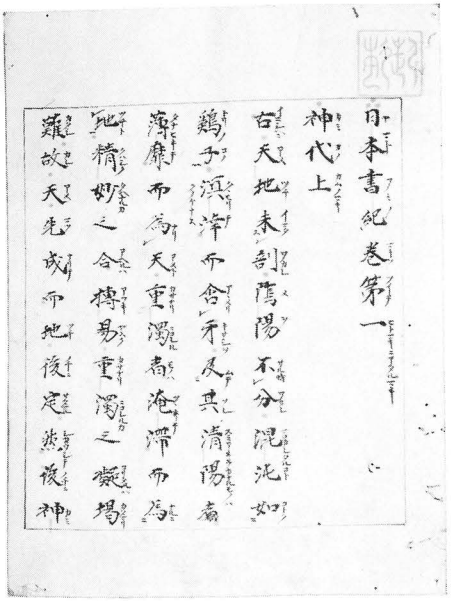
日本書紀神代巻　二巻二冊　延宝七年（一六七九）刊

尾崎良知旧蔵書〈三六―八二〉

日本書紀神代巻抄　二巻三冊　慶長年間写

寛永一二年（一六三五）成瀬隼人正

正虎献上本　〈一〇五―四三〉


日本書紀卷第一
神代上
古天地未剖陰陽不分混沌如
鷄子溟涬而含牙及其清陽者
薄靡而為天重濁者淹滯而為
地精妙之合搗易重濁之凝竭
難故天先成而地後定然後神

巻　頭

日本書紀神代巻講習次第抄　一二巻一二冊

元禄一五年（一七〇二）刊〈三―八〉

日本書紀第二（断簡）附・日本書紀巻一

昭和一六年（一九四一）影印

〈六五―七三〉

日本書紀（巻一―一〇）　一〇巻三冊　江戸初期写

〈一〇五―四四〉

日本書紀　三〇巻一五冊　寛文九年（一六六九）刊

神代上下卷依大夫傳石見守長安
叢命以累家秘本書寫之同加
朱墨亦點訖得真許外見矣
慶長己酉季夏吉曜日
神祇伯顕孝在信郎朝臣

奥　書

神村忠貞校合本〈四三―五〉

▽参考

① 卜部兼見は近世初期の神学者で、豊国神社の神官をつとめ、家学の卜部神道をもって知られた。弟の神竜院梵舜も神仏両道に通じ、徳川家康の学術顧問として活躍した。

② 大久保長安は、初め武田信玄に仕え、のち、家康に従って鉱山の開発、街道の整備、検地など、主として産業経済方面に手腕を振るったが、兼見に対して、卜部家の秘本「日本書紀」の筆写まで命じているのは興味がふかい。

③ 尾崎良知は幕末の尾張藩士。徳川慶勝の側近として、用人・勘定奉行などの要職に就き、国事に奔走して功績が多かった。敬斎と号して儒学にも素養があり、その蔵書は、のちに蓬左文庫に寄贈された。

④ 成瀬正虎は犬山城主二世で、尾張藩の執政としてよく藩主義直を輔佐した。

⑤ 神村忠貞は江戸中期の尾張藩士で、養父正隣と共に国学にくわしく、また蔵書家として聞こえた。その没後、蔵書の多くは藩の文庫に納められ、蓬左文庫に伝わっている。

二、日本書紀纂疏

〈一〇一―二〉

一条兼良（一四〇二―八一）
六巻・六冊
室町時代写（朱点入り）
内題「日本書紀纂疏第一（巻第二―巻第六）」
外題「日本書紀纂疏　一（―六）」
袋綴じ・薄茶色無地紙表紙
二九×二〇・五ｾﾝﾁ
四周双辺・墨界・八行・二〇字
巻一　三一丁・巻二　三八丁・巻三　二九丁・巻四三九丁・巻五　三一丁・巻六　三四丁
頭注・脚注あり
「御本」「尾陽内庫」印記

日本書紀纂疏第一

藤義良 述

神代上之一

巻頭

『日本書紀』の神代巻に漢文で注釈を加えたもの。『日本書紀』『古事記』『旧事記』の関係や上代の文字・日本の国号などについても論じている。神道の解釈に、儒教・仏教の思想もとり入れ、いわゆる神・儒・仏三教一致論を展開し、宝町期における神道思想研究のための貴重な資料である。

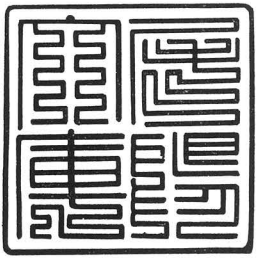
著者は宝町初期の公卿・学者で摂政・関白・太政大臣を歴任した。有職故実・歴史・文学・儒学・宗教など伝統的な学問に詳しく、中世の和学を集成し、近世の国学・古典研究の基礎を作った。また、桃華文庫を建てて、内外の典籍を収集した。著書も多く、「公事根源」「東斎随筆」「花鳥余情」などがあり、「源氏物語」の研究にも大きな業績をあげた。

▽参考

丁数および冊数について

第二巻末に「墨付六十九丁」第四巻末に「墨付六十八丁」第六巻末に「墨付六十五丁」とあって、当初は三冊本であったことが『御文庫御書物便覧』（小沢鎮盈著）からも知られる。本書によれば「古写本三冊」とあり、後年、六冊に分けたものと思われる。

「御本」印記



「尾陽内庫」印記

三、続日本紀（重要文化財）　〈一六八―一〉

菅野真道・藤原継縄等
四〇巻・四〇軸
鎌倉時代写（寄合書。巻一―巻一〇　慶長一九年補写）
内題「続日本紀第一（―四十）」（内題を欠く巻もある）
外題「続日本紀第一（―四十）」
巻子本・木軸（丸）・紙装
三〇×五二八・八―一七六八・二糎（最長「巻三六」最短「巻一」）・墨界・界高二四・七―二四・九糎
金沢文庫旧蔵・伊豆山神社（熱海市）旧蔵
「金沢文庫」（巻一一―巻四〇。巻一―巻一〇には、巻首に「金沢本写」の四字を記す）・「御本」印記
昭和二九年三月二〇日　重要文化財指定

「日本書紀」に続く二番目の官撰の歴史で、文武天皇の元年（六九七）から、桓武天皇の延暦一〇年（七九一）まで、九五年間の史実を編年体で記したもの。内容が正確・詳細で、奈良時代とその前後各一〇年間における最大の根本史料である。延暦一六年（七九七）に完成した。

なお、本書のうち、巻一一―巻四〇は、現存最古の「続日本紀」（旧尾州家本）として名高い。

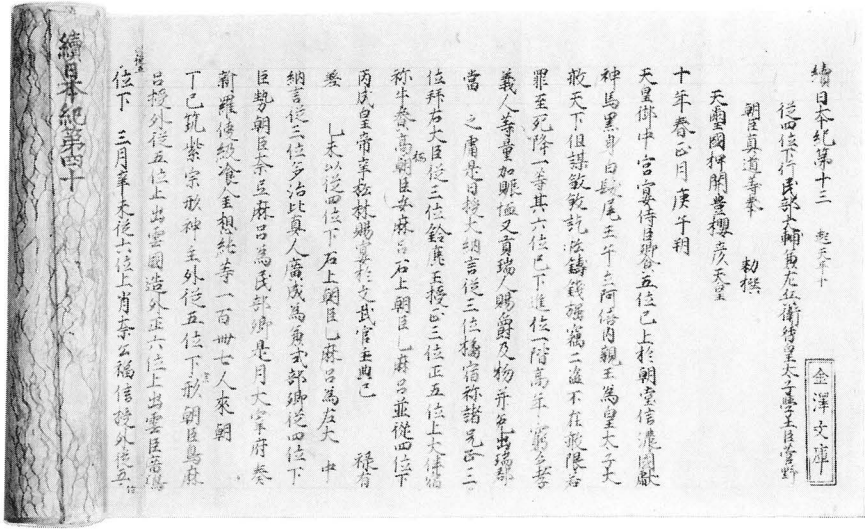
菅野真道（七三八―八一一。一説には七四一―八一四）は、百済国都慕王十世孫貴首（須）王の子孫で、平安初期の学者。

藤原継縄（七二七―八〇六。没年は、一説に七九六）は、大蔵・宮内・兵部卿などを経て、大納言から右大臣に進み、桃園右大臣といわれた。

○諸本

続日本紀　江戸初期写　四〇巻一三冊

寛永一一年（一六三四）角倉平次献上本



三　第　十　巻

〈一〇五―四六〉

同　立野春節校　明暦中刊　四〇巻二〇冊

慶応三年（一八六七）植松有園等校合書入本　愛知県師範学校（現―愛知教育大学）旧蔵　〈七一―二七〉

同　明暦年間刊　四〇巻二〇冊　神村忠貞校合本　〈四三―六〉

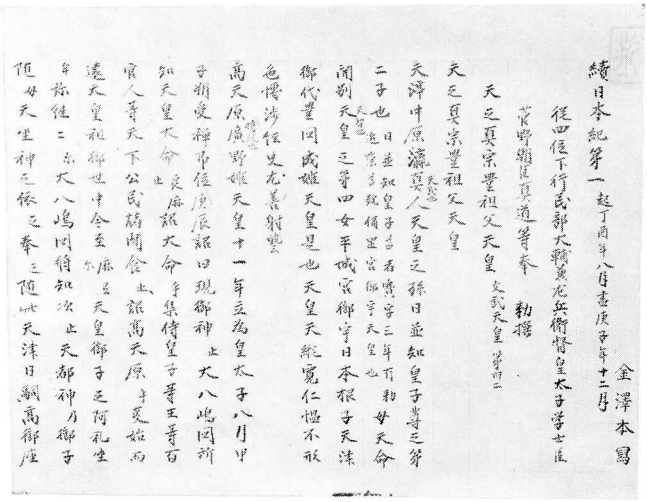
▽参考

① 「駿府記」慶長一七年（一六一二）三月一〇日の条に、「伊豆山般若院快運、古写の続日本紀を献ず、林道春をして読ましめらる」とある。この本は、巻一―巻一〇を欠いていたので、家康は、その部分を別の金沢文庫本によって補写させた。

② 金沢文庫。鎌倉幕府の執権北条義時の孫で当時の武家中随一の愛書家実時がその領地武蔵国金沢（現横浜市金沢区）に創設したもの。各種の貴重な典籍に富み、現存するその旧蔵書は、ほとんど国宝・重文に指定されている。室町時代以後、かなり散逸したが、家康が極力これをまとめて、江戸や駿府の文庫に収めた。いま、その跡は神奈川

県立金沢文庫として公開されている。

③　角倉平次は、近世初期の大事業家で儒学者としても有名な素庵・角倉与一の次男。尾張家とも関係が深く、本書のほか「文徳実録」「三代実録」「菅家文草」などの精写本を献じている。



巻　一（慶長補写本）

四、侍中群要（重要文化財）　〈一六七―一九〉

橘　広相

一〇巻・一〇軸

嘉元四年（一三〇六）写（北条貞顕筆・朱注入り）

内題「侍中群要第一―第十」

外題　欠

巻子本・軸心水晶（八角）・紺色無地紙装

紙背文書あり。

二九・五×七二四・二―九四二・四㌢（最長「巻七」最短「巻二」）・墨界・界高二四・三―二四・四㌢

奥書　嘉元四年四月五日以水谷大蔵大輔清有之本書写校合畢　貞顕

養和元年十一月十一日癸未天陰辰刻終書写之功

以江州息五品羽林（親家）之本写之転展書写之

間　少々有字僻事等歟　同十五日移点校合訖
此書本上下巻也　而依為大巻分為十巻　為無披
閲煩也

「金沢文庫」「御本」印記

昭和二九年三月二〇日　重要文化財指定

宮廷で、文書や物品の出納などを取り扱い、儀式・行事などを執行する蔵人（「侍中」はその唐名）の職務に関する事柄を集録した書で、平安初期の制度史料として貴重なもの。紙背に、散らし書きの消息文・伊勢物語の一部・北条顕時（一二四八―一三〇一・実時の子）の書状などがあり、現存最古の完本である。

橘広相（八三七―九〇）は、左大臣橘諸兄の子孫で、初名は博覧、字は朝綾という。文章博士として平安初期有数の学者の一人で、その学識・文才は、高く評価されている。著書に「朝官当唐名略鈔」「蹈歌記」「家集」などがある。

本書は、慶長一九年七月、日野唯心（輝資）より家康へ献上。明治初年、一時、近衛家へ譲られたが、昭和一〇年、近衛家から本文庫へ復帰した。

○諸本

侍中群要　寛永元年（一六二四）写（金沢文庫本写）
一〇巻一〇軸　〈一〇八―五七〉

翻刻本

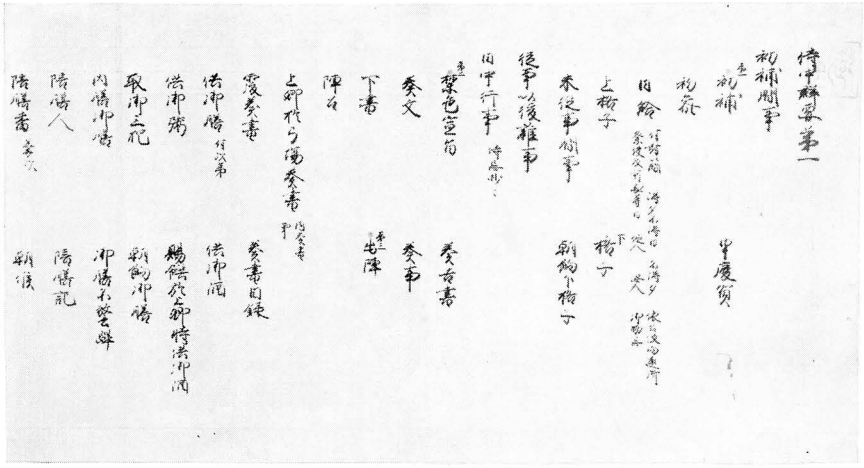
同　（「続々群書類従第七」所収）
〈A三一―一三〉

▽参考

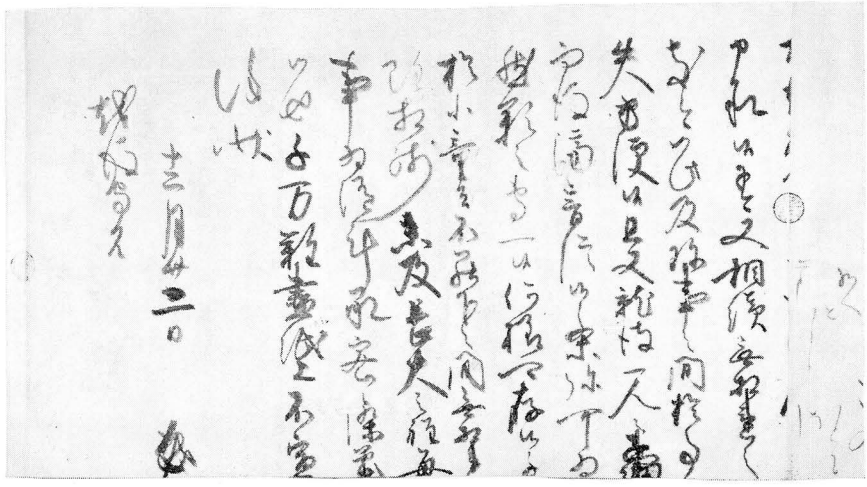
① 北条貞顕は、鎌倉幕府十五代目の執権で、金沢文庫を創設した実時は、その祖父にあたる。同じく好学の武人で、多くの典籍を収集し、また、書写や校勘にもつとめた。金沢文庫が整備されたのも、貞顕の時代といわれる。元弘三年（一三三三）鎌倉滅亡のときに自刃。

② 近藤守重「右文故事」中の「御代々文事表」（巻一）慶長一九年（一六一四）七月の条に「二十九日、日野唯心、侍中群要抄十巻ヲ献ズ、金沢文庫本也、先年、豊臣関白秀次コレヲ取テ日野家ニ贈ラレシ本ナリ」とある。

③ 全巻に紙背文書があり、次ページ写真（下段）は北条顕時（越後守）宛書状と推定される。



巻　　頭



紙背文書（第十）

五、貞永式目抄

〈一〇一―一二〉

清原宣賢

二冊

慶長年間写（片仮名まじり・朱点入り）

内題「御成敗式目」

外題「貞永式目抄　上（下）」（題簽　松平君山筆）

袋綴じ・薄茶色無地紙表紙

三二×二三糎

無界・一〇行（注双行）

上巻　七四丁　下巻　七五丁

序抄

奥書　以二祖父常忠御説一先年令二抄出一之処局務外史業賢盗賢取之間重令レ抄二出之一以二此本一可レ為レ証一子外不レ可レ許二一覧一而已

天文三年（一五三四）閏正月廿八日終其功

清三位入道

環翠軒　宗尤　判

右式制者准格条将相御政務之律令也挙世用之行之対追加謂之本条乎吾祖環翠為思蒙以仮名下注釈畢一家不出之秘本也然洛中錯之砌失却之于爰幽斎玄旨志道遊芸之余感得此抄索奥書余不及固辞加證明勿令出窓下而已

天正第十六暦（一五八八）夏五十又三

雪菴道白　判

「御本」印記

「貞永式目」（じょうえいしきもく）は「御成敗（ごせいばい）式目」ともいい、貞永元年（一二三二・鎌倉初期）執権北条泰時が、太田康連ら評定衆に編纂さ

せた五十一カ条の法令集である。当時の裁判の典拠とするために、源頼朝以来の慣習法を成文化したもので、以後の不十分な点は「式目追加」で補充した。封建政治の基本的文献となっており、本書はその注釈。徳川家康は、「吾妻鏡」などとともに、江戸幕政の参考とした。

清原氏は、天武天皇の皇子舎人親王の子孫で、夏野・深養父・元輔・清少納言など、学問・文学方面にすぐれた人物を出している。

宣賢（一四七五―五五〇）は、室町後期の代表的な学者の一人で、和漢の古典に通じ、「神代巻鈔」「職原鈔私記」「四書鈔」「伊勢物語惟清鈔」などを著わし、とくに経書の解釈には朱子学をとりいれて、いわゆる清家点を大成した。環翠軒はその号、宗尤は法名である。

貞永式目（先代遺法遺法ハ関東一代ニ於テ天下ニ行ハル所法々遺ス事也関東一代ニハ高倉院治承四年起テ光厳院元弘三年ニ至テ十八朝ヲ経テ百五十四年ニ成代始ハ右兵衛権佐源頼朝也 尼公 義朝三男 従五位下 右兵衛権佐 正二位 征夷大将軍 従二位 内大臣 右大臣 従一位 太政大臣 従二位 右大臣 従一位 太政大臣 従二位 右大臣 従一位 太政大臣 従二位

○諸本

貞永式目　元禄一五年（一七〇二）写　一冊

〈三二―四九〉

同　（「群書類従巻四〇〇」所収）〈七六―一〉

貞永式目追加　（　同　）

御成敗式目　小槻伊治点　慶長一二年（一六〇七）刊

〈一〇五―三〉

同　昭和五年（古典保存会）影印

〈六五―三六〉

翻刻本

御成敗式目注　（「続々群書類従　第七」所収）

〈A三一―一三〉

六、公事根源

〈一〇一―一一〉

一条兼良

二冊

室町時代写（平仮名本）

外題「年中行事　乾（坤）」　乾　表紙裏に貼紙あり

「応永二十九年之写　年中行事　二冊」

袋綴じ・茶色無地紙表紙

二八・五×二二・四糎

無界・一〇行

乾　六九丁　坤　三一丁

奥書　（「乾」巻末）

応永二十九年（一四二二）正月十二日書之畢

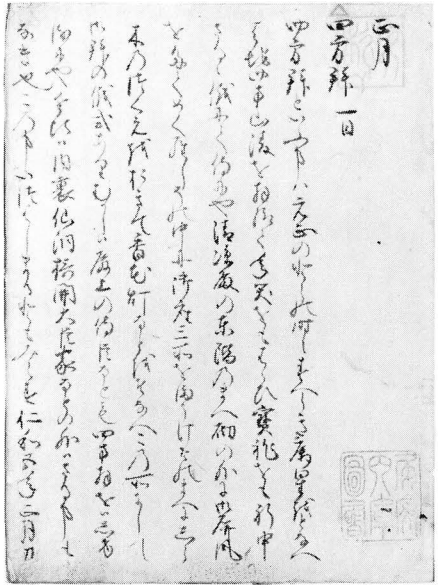
内大臣

偏為嬰児也　外見有憚

「公卿補任」によれば、兼良は、応永二八年七月、大納言から内大臣に昇任しているので、著者の奥書とみられる。

「御本」「尾府内庫図書」印記

宮廷における年中行事とその由来を、正月から十二月まで、月日順に記述した有職故実の書。



巻　頭

「建武年中行事」（後醍醐天皇撰）および二条良基（鎌倉末期から室町初期にかけての歌学者）の「年中行事歌合の判詞」に拠るところが多いといわれている。

著者一条兼良については、「日本書紀纂疏」の項参照。

○諸本

公事根源　慶安二年（一六四九）刊　三巻三冊　〈四―一四〇〉

公事根源　松下見林注　元禄七年（一六九四）刊　三巻三冊　〈四―一四一〉

七、重撰皇統編年合運図　〈一〇一―一三〉

編著者　未詳

二冊

慶長年間写（慶安二年〈一六四九〉補写）

内題「重撰皇統編年合運図」

外題「編年合運図　天（地）」（題簽　松平君山筆）

袋綴じ・薄茶色無地紙表紙

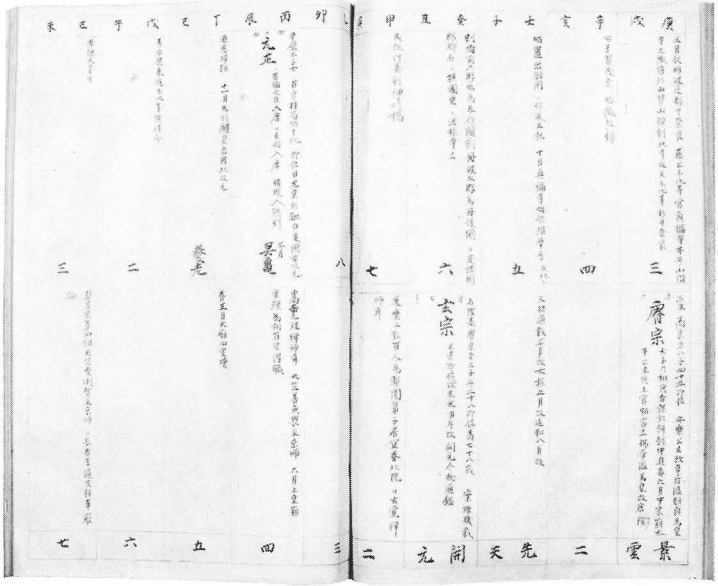
三二・八×二三・七糎

四周単辺・墨界・五行（二段）

天　一二五丁　地　一六三丁

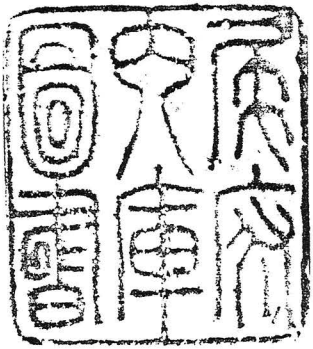
「御本」「尾府内庫図書」印記

わが国および中国の皇統を中心に、それぞれ各年代



本　文

の重要事項を、上段は日本、下段は中国に別けて対照的に編年体で記したもの。双方、神話の時代（日本―天神七代・中国―盤古・天地未分時惟一気耳混沌如難子盤古生其中）から始まり、文禄三年（一五九四）でおわる。同四年以後は慶安二年（一六四九）の補写である。



「尾府内庫図書」印記

八、武家昇晋年譜

〈一〇一―八〉

編著者　未詳

一冊

室町末期写

内題「武家昇晋年譜　附　朝儀　参勤　篇目」

外題「武家昇進年譜　全」（朱書）

袋綴じ・紺無地紙表紙

二八・五×二一・三㌢

四周単辺・墨界・八行　四一丁

「御本」印記

足利将軍およびその主要な一族の履歴を集成したもので、初代尊氏（一三〇五―五八）からはじまり、十

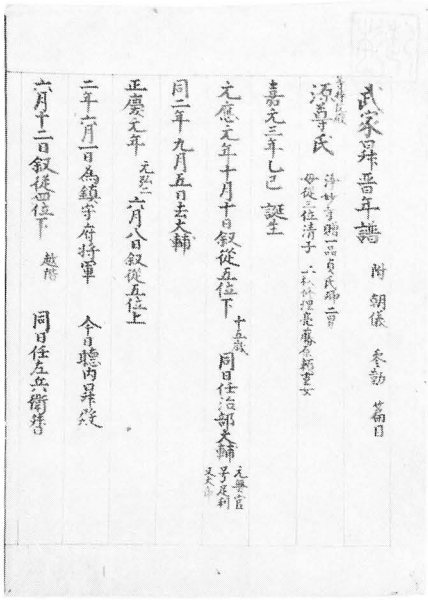
二代義晴（一五一一―五〇）まで、生没・任官・叙位・行事などの次第が比較的詳しく記されている。

収載人名―尊氏・義詮・義満・義持・義教・義政・義尚・義稙・義晴・義藤・直義・満詮・義嗣・義量・義勝・義視。

○参考本

足利家官位記（「群書類従巻四八」所収）

〈七六―一〉


武家昇殿年譜　附　朝儀　参勤　箔目

源尊氏　浄妙寺贈一品尊氏卿二男　母従三位清子　二条付理裏書家紋室女

嘉元三年乙巳　誕生

元應元年十月十日叙従五位下　十五歳　同日任治部大輔　元亨元年　尊氏　足利　大夫

同二年九月五日去大輔

正慶元年　元弘二　六月八日叙従五位上

二年二月二日為鎮守府将軍　今月聴内昇殿

六月十二日叙従四位下　越階　同日任左兵衛督

巻頭

九、方丈記

〈一〇一―七〉

鴨　長明

一冊

慶長年間刊（古活字版）

外題「方丈記　全」（墨書）

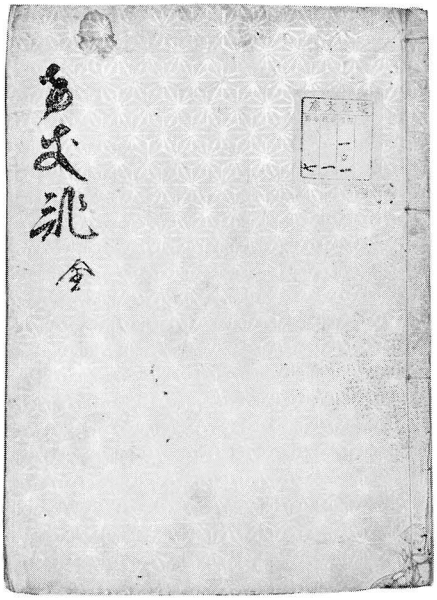
袋綴じ（原装）・梨色紙表紙（銀の麻の葉模様）

三〇×二一・四糎

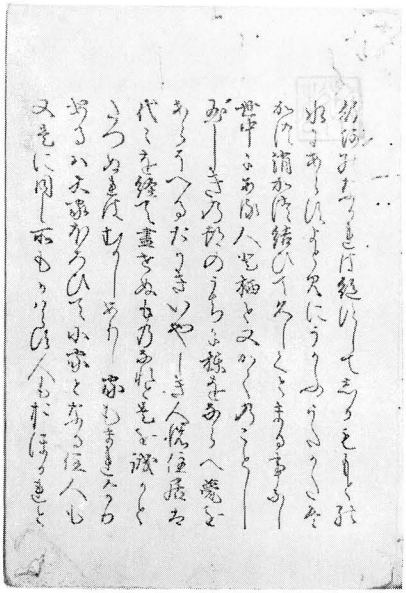
無界・一〇行・一六字―一八字　二四丁

「御本」印記

著者（かもノながあきら・一一五三―一二一六）は、鎌倉初期の文人・歌人で、通称菊大夫・法名蓮胤。京都加茂御祖神社の祢宜鴨長継の子として生まれた。



表紙



巻頭

著書には、本書のほか、「発心集」「無名抄」「鴨長明集」などがある。

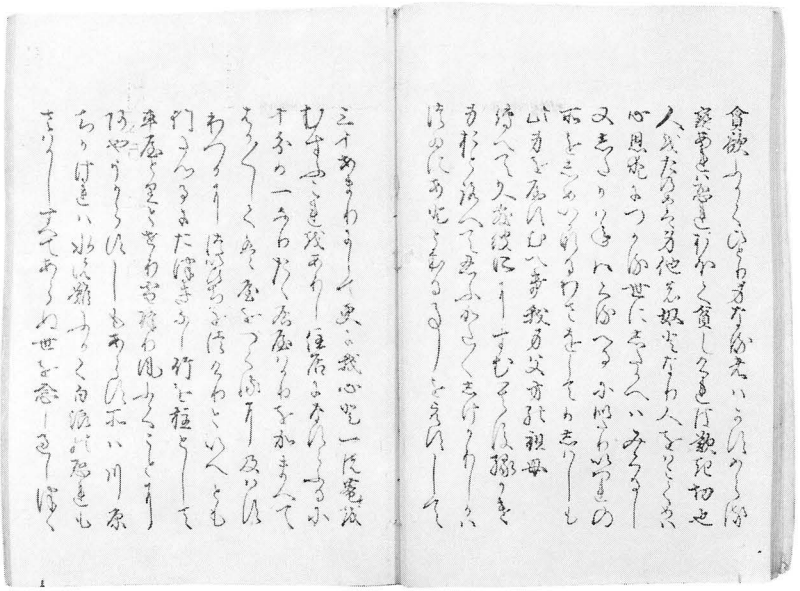
本書は長明の青壮年期に体験した五大災厄―安元三年（一一七七）四月の大火・治承四年（一一八〇）四月の大風・同年六月の福原遷都・養和（一一八一）の飢饉・元暦（一一八四）の大地震―や源平の争乱などにより、人生の無常を感じ、建暦二年（一二一二）三月から、日野山麓の方丈の草庵で隠遁生活に入った時の自伝的随筆で、流麗・簡潔な文章は、「徒然草」とともに、中世随筆文学の名作とされている。嵯峨本系統の古活字版であるが、一般の嵯峨本「方丈記」と版式・装丁を異にし、同種のものは京都大学附属図書館本など、二・三を遺すにすぎないといわれる。

（本書の一三丁に活字二字の脱落がある）

○諸本

方丈記　江戸初期写　一冊　〈一〇七―三五〉

同　大正一五年古典保存会影印　一冊



本　　文（一三丁ウ・一四丁オ）

〈六五―四五〉

翻刻本

同　（「群書類従　巻四八〇」所収）〈七六―一〉

同　（「国文大観第七編」所収）〈J〇四―二〉

同　山田孝雄校訂　昭和一八年　一冊

〈J一八―三〉

同　同　昭和四〇年　一冊

〈J一八―一五〉

同　西尾実校注（「日本古典文学大系　三〇」所収）

〈J一八―二〉

氏孝本方丈記　簗瀬一雄・土田知雄共編

昭和三九年　一冊　〈J一八―七〉

三条家本方丈記　簗瀬一雄編　同　一冊

〈J一八―九〉

真字本・保最本方丈記　簗瀬一雄編　同　一冊

〈J一八―一四〉

中原本方丈記　簗瀬一雄編　昭和三八年　一冊

〈J一八―一一〉

延徳本方丈記　簗瀬一雄編　昭和三九年　一冊

〈J一八―八〉

名古屋本方丈記　簗瀬一雄編　昭和三八年　一冊

〈J一八―一二〉

簗瀬本方丈記　簗瀬一雄編　同　一冊

〈J一八―一三〉

吉沢本方丈記　簗瀬一雄編　同　一冊

〈J一八―一〇〉

方丈記宜春抄　簗瀬一雄編　昭和三七年　一冊

〈J一八―五〉

一〇、保元物語

〈一〇一―一〇〉

二冊

慶長年間写（片仮名交り本）

内題「保元物語巻上（下）」

外題「保元物語上（下）」

袋綴じ（原装）・朱色紙表紙（肉筆で花鳥・人物などを描く）

二九×二二・二糎

無界九行　上　五二丁　下　六二丁

「御本」印記

保元元年（一一五六）におこった保元の乱の顚末を述べた軍記物語。当時は貴族政治の末期にあたり、従来

政権を独占してきた藤原氏一門に大きな分裂を生じ、朝廷にも深刻な内訌があり、他方、新興武士階級の代表者源平両氏の間にも内部闘争があり、これらがからみあって、敵味方の関係は複雑な様相を呈した。

戦いそのものは規模が小さく、勝敗は短時間に決ったが、その結果、藤原政権はますます衰え、平清盛・源義朝の両者が勢力を伸ばした。記事は、後白河天皇の即位にはじまり、崇徳上皇側（藤原頼長・源為義ら）の敗北を結末としているが、源為朝らの活躍が中心になっており、一種の英雄物語的な要素をもっている。中世文学の特色とされる軍記物語の第一作で、文学史的にも重要であるが、『兵範記』〔平信範（一一一二―八七）の日記〕とともに、この乱に関する史料としての評価も高い。

著者については、葉室時長・中原師梁・源喩僧正などの諸説があるが、明らかでない。

表紙

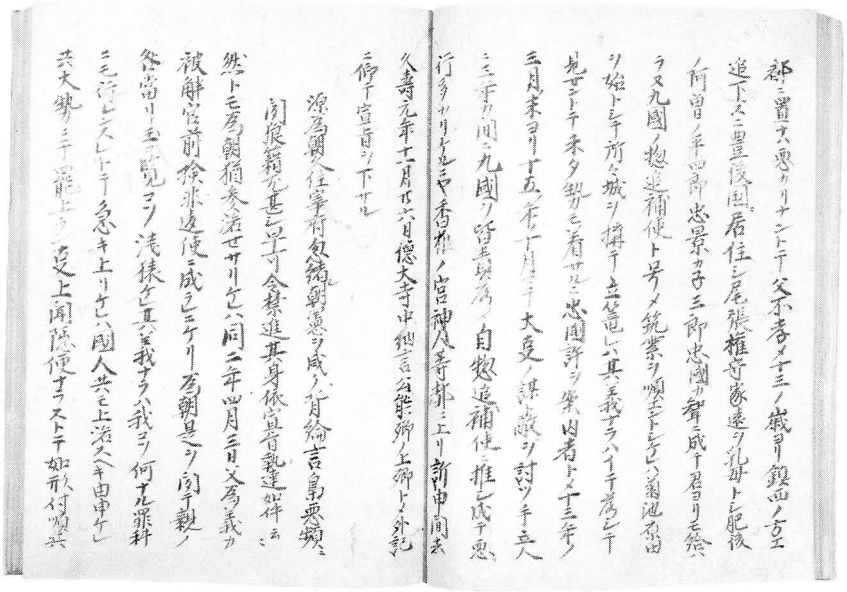
○諸本

保元物語　慶長年間写（平仮名交り）
駿河御譲本　二冊　〈一〇一―九〉

絵本保元平治　秋里籬島　享和元年（一八〇一）刊
一〇巻　五冊　〈一一―七三〉

翻刻本

保元物語　永積安明・島田勇雄校注（日本古典文学大系三一）　〈J二〇―一六〉



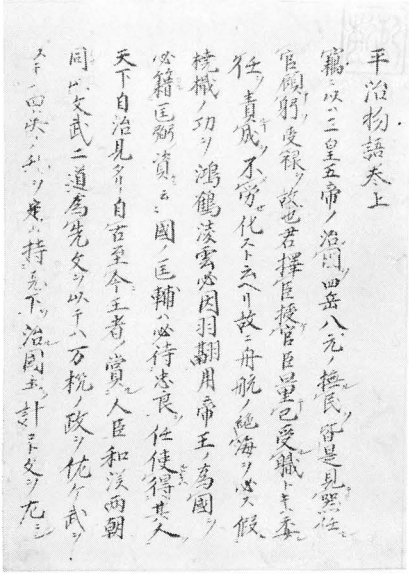
文本　保元物語

一一、平治物語　〈一〇一―一〇〉

三巻・三冊
慶長年間（片仮名交り本）
内題「平治物語　巻上（中・下）」
外題「平治物語上（中・下）」
袋綴じ（原装）・朱色紙表紙（肉筆で花鳥・人物などを描く）
二九×二二・三糎
無界九行
上　四三丁　中　四八丁　下　四八丁
「御本」印記

保元の乱後、平治元年（一一五九）におこった平治の

表紙



巻頭

乱の始末を述べた軍記物の一つで、保元の乱の結果、中央に進出した平清盛と源義朝の争覇を主題とし、平氏の勝利によって、その政権の基礎が定まった。成立年代は、承久二年（一二二〇）前後といわれている。「保元物語」の姉妹本で、平仮名交り本・片仮名交り本それぞれ同じ様式になっている。

著者は「保元」と同一らしいが、明らかでない。

○諸本

平治物語　慶長年間写（平仮名交り）

駿河御譲本　三巻三冊　〈一〇一―九〉

同　寛永元年（一六二四）刊　三巻三冊

〈七―二〉

絵本保元平治　秋里籬島　享和元年（一八〇一）刊

一〇巻五冊　〈一一―七三〉

翻刻本

平治物語　（「国文大観　第九編」所収）

〈J〇四―二〉

同　永積安明・島田勇雄校注（「日本古典文学大系三一」）　〈J二〇―一六〉

▽参考

「保元物語」と同じく、本書の転写本が神宮文庫にある。

本書はまた、保元物語などを含めて「語りもの」としての性質上、異本が多いことも特色のひとつといえる。

なお、保元・平治の両乱とも、戦いの規模は大きくないが、その舞台が京都であり、皇室・藤原氏など、当時の社会の最上層部の争いであったため、その勝敗は、貴族の衰退と武士の興隆とに決定的な意義をもたらした。

一二、沙石集　〈一〇一―三〉

無住一円

八巻・八冊（全一〇巻・一〇冊のうち、第一・二巻の二冊を欠く）

慶長一〇年（一六〇五）刊（古活字版）

内題「沙石集第三（―第十）」

外題「沙石集三（―十）」（題簽　松平君山筆）

袋綴じ・薄茶色無地紙表紙

二八×二〇㌢

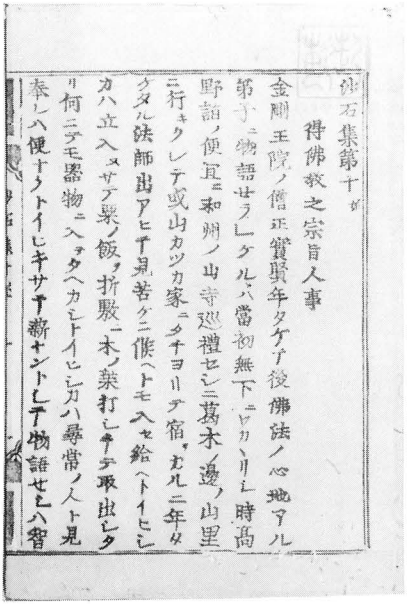
四周双辺・無界・一〇行

三―四八丁　四―四八丁　五―五九丁　六―五一丁

七―五三丁　八―四二丁　九―四九丁　十―二九丁

奥書（第三巻末）

表　紙



本　文（第十巻頭）

神護寺　迎接院

永仁第三之暦（一二九五）乙未孟夏初九日於西山之大原野書写之畢　片山貧士道慧春秋四十六

乾元第二暦（一三〇三）癸卯季春之候此書道證上人奉渡畢　道慧

（第四巻末）

神護寺　迎接院

乾元第二暦　癸卯季春之候此書道證上人奉渡畢

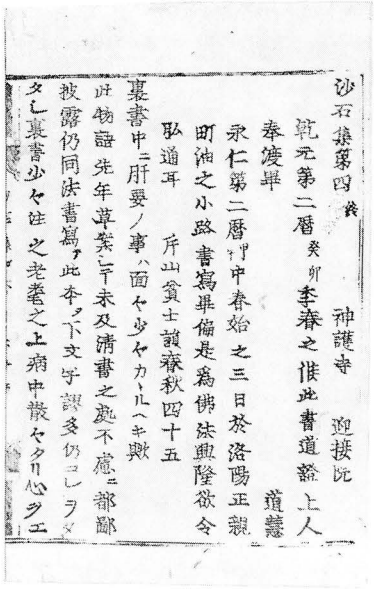
道慧

永仁第二暦　甲午中春始之三日於洛陽正親町油之小路書写畢偏是為仏法興隆欲令弘通耳

片山貧士韻春秋四十五

裏書中ニ肝要ノ事ハ少々カヽルヘキ歟

此物語先年草案シテ未及清書之処不慮ニ都鄙披露仍同法書写テ此本ヲ下文字謬多仍コレヲタタシ裏面少々注之老耄之上病中散々タリ心ヲエテ清書セラレ候ヘシ



沙石集第四終　　神護寺　迎接院

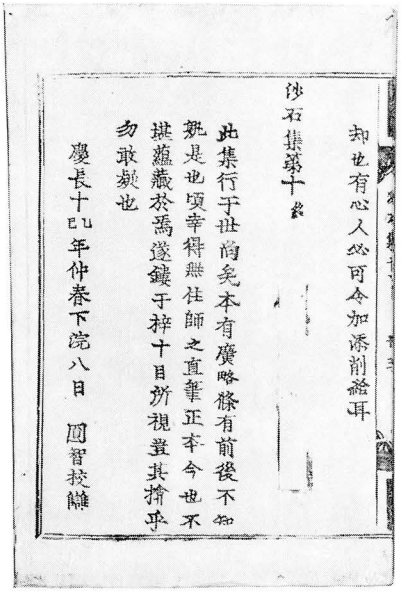
乾元第二暦癸卯季春之候此書道證上人奉渡畢　道慧

永仁第二暦甲申春始之三日於洛陽正親町油之小路書寫畢偏是爲佛法興隆欲令恥通耳　片山貧士道慧年齡春秋四十五

裏書中ニ肝要ノ事ハ面々少々カヽルヘキ歟

此物語先年草案ニ半未及清書之處不意ニ都鄙被露仍同法書寫ヲ此本ヲ下文字課多仍コレヲ又又シ裏書少々注之老耄之上病中散々タリ心ヲ工夫シ

巻　末（第四）



知也有心人必可令加添削給耳

沙石集第十終

此集行于世尚免本有廣略條有前後不知熟是也頃幸得無住師之直筆正本今也不揣蘊藏於焉遂鏤于梓十目所視豈其揣乎勿敢疑也

慶長十九年仲春下浣八日　圓智校雕

巻　末（第十）

（第五巻末）

神護寺　迎接院

永仁第三之暦乙未孟夏中之六日於西山大原野而写畢　片山貧士道慧

乾元二暦癸卯季春之候此書道證上人奉渡畢　道慧

（第六巻末）

神護寺　迎接院

永仁第三之暦乙未孟夏後七日於西山大原野而書写了　片山貧士道慧

乾元二暦癸卯季春之候此書道證上人奉渡畢　道慧

（第七巻末）

神護寺　迎接院

乾元二暦癸卯季春之候此書道證上人奉渡畢　道慧

于時乾元第二之暦癸卯季春初之六日於洛陽之西山西

方寺又重一部書写之次此巻奥一枚書改之畢
片山隠士道慧春秋五十四
（第八巻末）
神護寺　迎接院
正応第六（一二九三）之天癸巳仲夏初二日於洛陽土
御門油小路書写之　片山貧士　韻
乾元第二暦　癸卯季春之候此書道證上人奉渡畢
道慧
（第九巻末）
神護寺　迎接院
乾元二暦　癸卯季春之候此書道證上人奉渡畢
道慧
于時乾元第二之暦　癸卯季春初之六日於洛陽之西山西
方寺重又一部書写之次此巻前後一枚書改之畢　片山
隠士道慧春秋五十四
（第十巻末）
此集行于世尚矣本有広略條有前後不知孰是也頃幸得
無住師之直筆正本今也不堪蘊蔵於焉遂鏤于梓十目所
視豈其揜乎勿敢疑也
慶長十乙巳年仲春下浣八日　円智校讐
「御本」印記

著者（一二二六―一三一二）は鎌倉時代の禅僧。俗姓梶原・諱道暁・号一円・通称無住。鎌倉に生まれ、十八才で出家、諸国を修行して顕密諸教を学ぶ。文永（一二六四―七四）のはじめ、尾張長母寺（現在―名古屋市東区矢田町）をおこした。

著書に「雑談集」「聖財集」「妻鏡」などがある。

本書は、五十三―七才にかけての著作で、「沙（砂）の中の金、石の中の玉を集める」という趣旨のもとに書かれたものである。内容は、信仰の大衆化を目的に、仏教を中心とした通俗的な説話百余種を収め、平易な和文で記されている。滑稽譚なども多く含まれ、江戸時代の落語や笑話の祖となっているものもある。

○諸本

沙石集　正保四年（一六四七）刊　一〇巻一〇冊　〈二―六二〉

翻刻本

沙石集　渡辺綱也校注（「日本古典文学大系八五」所収）　〈J〇五―一〉

▽参考

①　松平君山。名は秀雲。江戸中期における尾張藩の代表的な学者で、書物奉行を長く勤め、この間本書をはじめ文庫蔵書の題簽を数多く書いている。

②　要法寺版。慶長一〇年、京都要法寺の僧円智（日性）が木活字を用いて刊行したもの。

③　貞享版「沙石集」。名古屋市東区の長母寺は、無住を中興の開山とする古刹で、ここから貞享版「沙石集」が刊行されたが、その版木が同寺に遺され、名古屋市文化財の指定をうけている。

一三、自然斎発句　〈一〇一―五〉

釈　宗祇

一冊

室町時代写

内題「自然斎発句」

外題「自然斎発句　全」

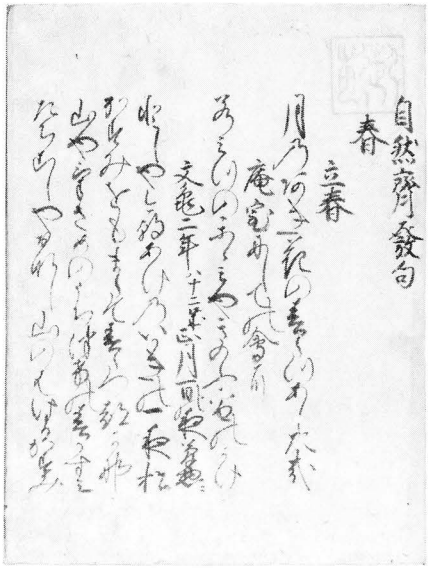
袋綴じ・薄青色無地紙表紙・薄柿色題簽紙

二五×二〇㌢

無界・一一行　八二丁

「御本」印記

著者（一四二一―一五〇二）は、室町中期の文学者。自然斎・種玉庵と号し、特に連歌にすぐれ、諸国を旅



本文巻頭

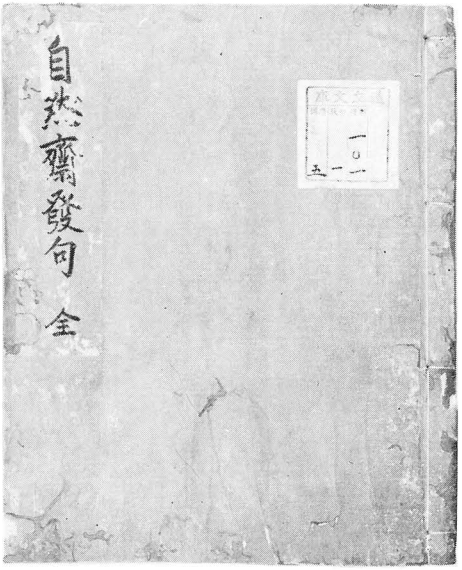


表　紙

行し、多くの門人をとりたてて連歌の全盛時代を築いた。和歌の西行、俳句の芭蕉の中間にあり「旅の詩人」として、日本文学に一つの大きな流れを形成した。また、志野流香道の開祖志野宗信と親しく、香道史上にも注目される人物である。

本書は著者の発句集で、立春の句「月のあき花の春立つあした哉」に始まり、「雑冬」および「已後書入分」（五句）に至るまで千数百句をおさめている。

このほかの編著に「萱草」（わすれぐさ）「下草」「老葉（わくらは）附合」「新撰菟玖波集」「吾妻問答」「竹林抄」などがある。

一四、古今和歌集聞書

〈一〇一―六〉

釈　宗祇

二冊

室町時代写

袋綴じ（原装）・うちぐもり表紙

内題「古今和歌集序聞書」

外題「古今和歌集　共二」

二六・九×二〇・二糎

無界・一二行

上　九六丁　下　九七丁

奥書（上巻末）

此聞書無子細者也

文亀二年（一五〇二）三月日　宗祇在判

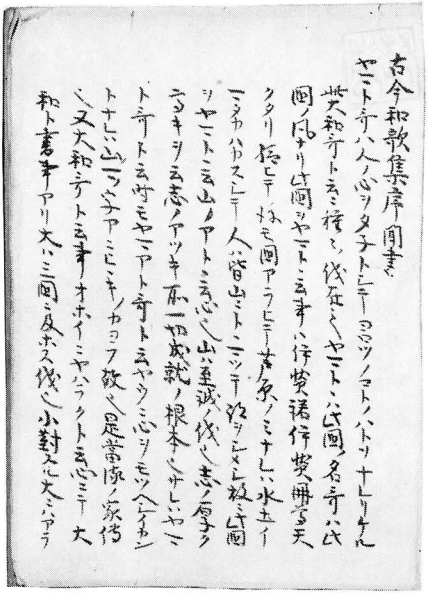
（下巻末）

右聞書尤無子細者也

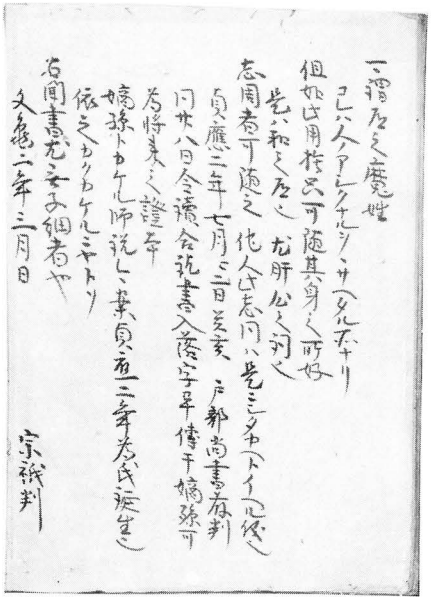
文亀二年（一五〇二）三月日　宗祇判

「御本」印記

「古今和歌集」の解説書で、東常縁（とうノつねより）から文明三年（一四七一）に聞書したもの。宗祇は、常縁から二条家正統の伝授を受け、歌道にも精通していた。



巻　頭



奥　書

○諸本

古今和歌集聞書　江戸初期写　一冊　〈一―三九〉

▽参考　東常縁。下野守に任じたので、東野州と呼ばれるが、美濃・郡上八幡をも領した。関東の武人千葉介常胤の子孫であるが、歌道にすぐれ、室町中期の歌人として重きをなした。

一五、狂雲集　〈一〇四―五五〉

一休宗純

一冊

文亀三年（一五〇三）写（朱点入り）

内題「狂雲集」

外題「狂雲集　全」

袋綴じ・薄茶色無地紙表紙

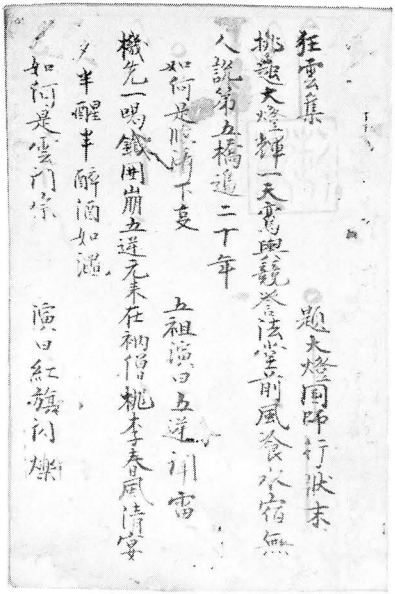
二一×一五・八糎

無界・九行

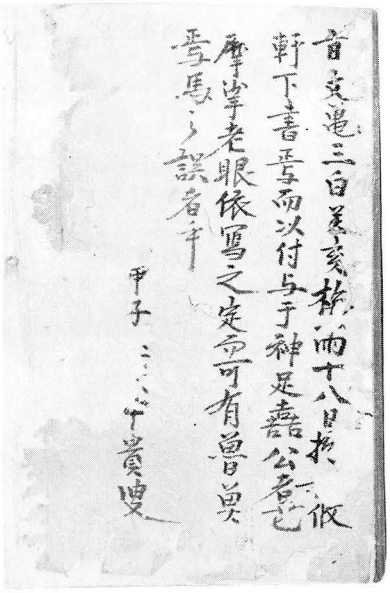
九八丁

奥書　時文亀三白癸亥梅雨十八日於□□軒下書焉而以付与于神足哲公者□摩挲老眼依写之定而可有魯魚焉馬之誤者乎

甲子（永正元年―一五〇四）□□□貴叟



本　文（巻頭）



奥　　書

「御本」印記

奇行と機知とによって広く一般にも知られる一休（一三九四―一四八一）の漢詩文集で、題名は彼の号狂雲子からとった。七言の詩五百余首と文章数編の中には、著者の人間性が強く現われている。

著者は室町前期の禅僧。京都紫野大徳寺に住み、同寺四十七世の住職をつとめ、また茶道においても一休派を創始した。著書には、ほかに「自戒集」「一休骸骨」「一休仮名法語」などがあり、当時の仏教界にきびしい批判の目を向けた。

本書は、著者の没後、間もない頃の古写本で、有名な真珠庵本などにつぐ善本である。

一六、翰林葫芦集

〈一〇四―五二〉

景徐周麟

二冊

室町時代写（第一冊朱点入り）

袋綴じ・薄茶色無地紙表紙

内題一―「翰林葫芦集二　語録」　二―「翰林葫芦集」

外題「翰林葫芦集　一（二）」

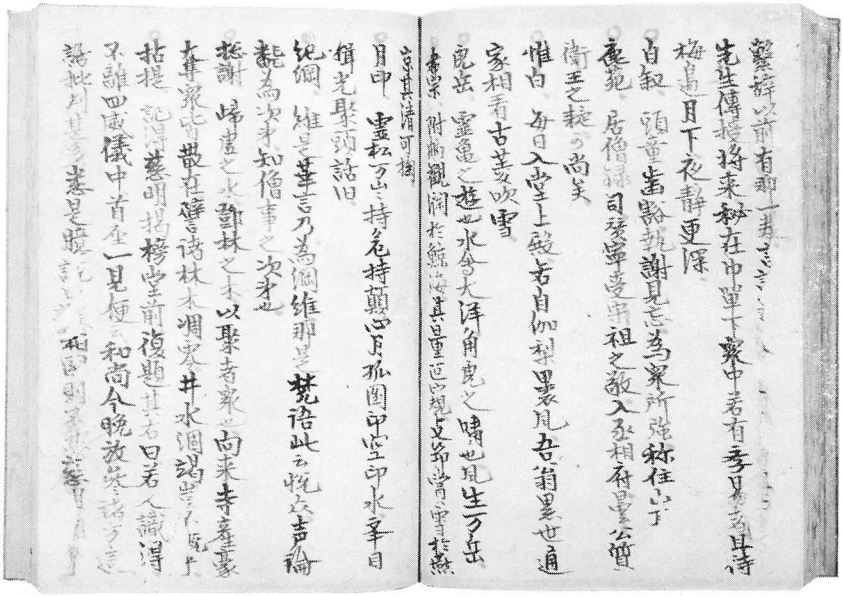
二〇・二×一五・五糎

無界・一〇行

一―八七丁　二―五六丁

「御本」印記

「翰林」は、学者や文人の集まり、「葫芦」は、ひ



本　文

さごの意で、漢詩文集である。著者（一四四六―一五一八）は室町中期の禅僧。名・周麟、字・景徐、号宜竹または半隠。京都の相国寺や鹿苑院（金閣）に住した。詩文を瑞渓周鳳（一三九一―一四七三）らに学び、五山文学の正統を継ぐものといわれている。著書は、ほかに「日渉記」がある。

本書は完本ではないが、最も古い写本の一つで、第二冊の五二丁オに、

天龍前板（中略）習之問禅　文明十六甲辰（一四八四）卯月

とある。

一七、聚分韻略　〈一〇一―四九〉

虎関師錬

二巻・一冊

室町時代刊

内題「聚分韻略巻之一（二）」

外題「略韻　全」（原書）

袋綴じ・茶色無地紙表紙

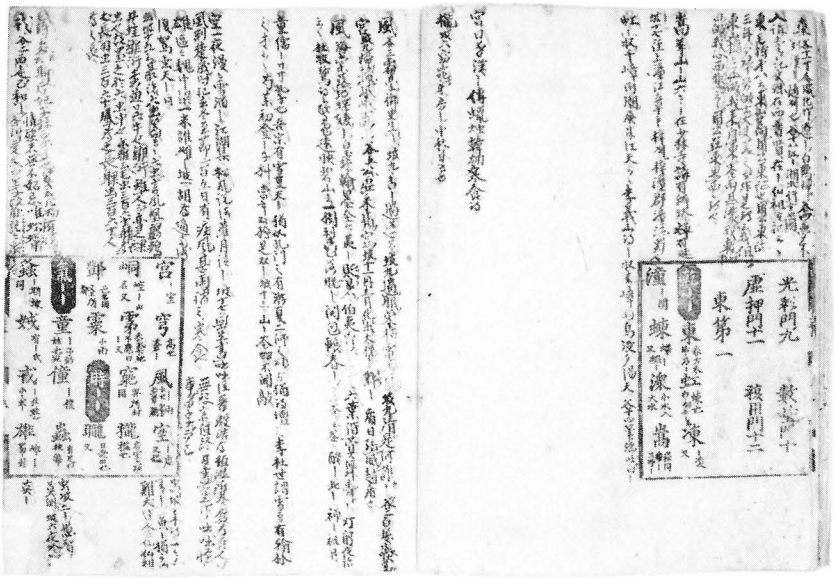
二六・五×二一・二糎（匡郭内一〇・一×八・二糎）

四周単辺・無界・五行

一〇六丁（原書九六丁）

本書は小型の原書を匡郭から切り取り、大型の冊子に貼りつけた改装本で、余白に書き入れが多い。

「御本」印記



本　　文

漢字の音韻に関する辞典で、簡単な字義や熟語の例も、まま、注されている。漢詩を作る時などの伴侶として、需要が多く、室町時代から江戸時代にかけて、たびたび刊行されたが、本書は、一般の刊本と異なる小型版で、室町前期のものといわれる。

著者は、鎌倉後期の有名な禅僧（一二七八―一三四六）。京都の南禅寺や鎌倉の円覚寺などで修行、また、宋から来日した一山一寧らに学んで、禅・儒両学に精通していた。著書には、わが国最初の仏教史といわれる「元亨釈書」をはじめ、「済北集」「仏語心論」「宗門十勝論」などがある。

一八、仏制比丘六物図抄　〈一〇四―七二〉

一冊

室町時代写（朱・墨両点入り）

内題「仏制比丘六物図」

外題「仏制比丘六物図抄　全」

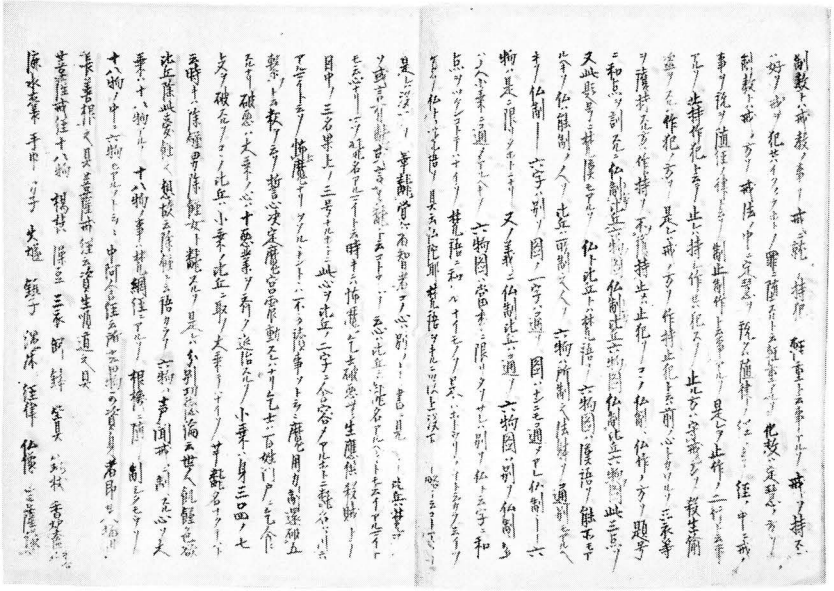
袋綴じ・茶色無地紙表紙

二六・九×二〇・三糎

無界・一五行　五四丁

「御本」印記

仏制による比丘必具の六物（僧伽梨・鬱多羅僧・安陀会・鉢多羅・尼師壇・漉水嚢）についての注釈書。「図抄」とあるが、本書には、図が略されている。片



本　文

仮名交りの文章で、講義筆記風に記されている。著者は未詳。

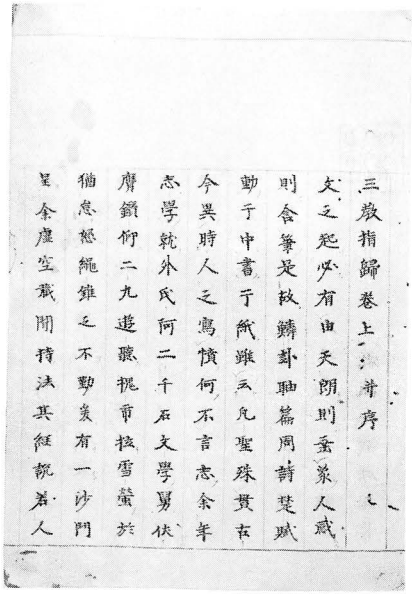
(1)　(2)

現在の蓬左文庫蔵書印

一九、三教指帰　〈一〇四―六七〉

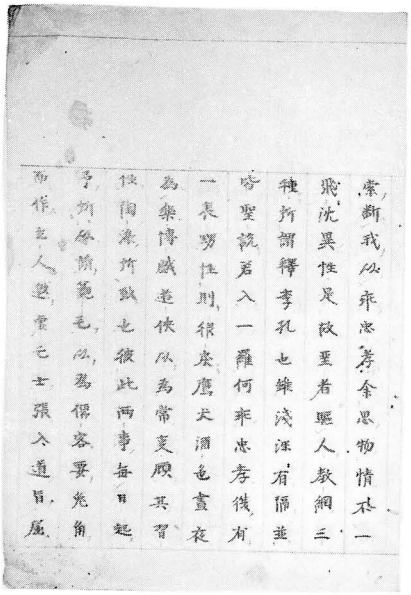
釈　空海
三巻・一冊
室町時代写（朱・墨両点入り）
内題「三教指帰　巻上（中・下）」
外題「三教指帰　全」
袋綴じ（改装）・茶色無地紙表紙
二九・五×二一・三㌢
墨界・九行・一三字　三九丁
序文　延暦一六年（七九七）臘月（十二月）一日
「御本」印記

「三教」（さんごう。本書は普通「さんごう・しい


三教指歸卷上　并序

文之起必有由天朗則垂象人感
則含筆是故鑄卦聯篇周詩楚賦
動于中書于紙雖云凡聖殊貫古
今異時人之寫憤何不言志余年
志學就外氏阿二千石文學舅伏
膺鎖仰二九遊職抵帝校雪螢於
猶息絕繩雖之不勤炙有一沙門
是余虛空藏聞持法其經說若人

頭　巻


蒙斷我以來忠孝余思物情不一
飛沈異性是故垂者聽人教綱三
種所謂釋李孔也雖淺深有師並
啓聖說若入一羅何來忠孝後有
一表男性則狠奏鷹犬酒色晝夜
為樂博戲逆快以為常爰顧其習
仮陶染竹戟也彼此兩事每日起
予別分簡毫毛以為佛客要免角
而作玄人塑雲毛士張入道旨屋

本　文

き」と読まれる）は、仏教・儒教・道教の意で、この三者を論じて帰するところは同一であるという原理を述べたものだが、とりわけ大忠大孝の道を説くものは、仏教のほかにはないことを強調している。本書は「亀毛先生論」「虚亡隠士論」「仮名乞児論」からなり、著者の青年期における出家宣言書ともいわれている。わが国の宗教界に与えた影響は大きく、無数の注釈書が著わされていることからも知られる。

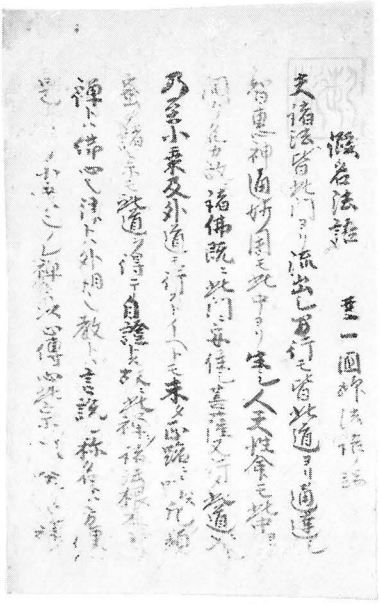
空海（七七四―八三五）は、讃岐国多度郡屏風浦に生まれ、姓は佐伯直、幼名は真魚、諡号は弘法大師。延暦二三年（八〇四）遣唐大使藤原葛野麻呂に従い、入唐して仏道を研究、高野山に金剛峰寺を建て、真言宗の開祖となった。著書は、本書のほかに「文鏡秘府論」「弁顕密二教論」「十住心論」「即身成仏義」などがあり、また、能書をもって名高く、嵯峨天皇・橘逸勢と共に平安初期の三筆として知られる。

二〇、聖一国師仮名法語　〈一〇四―四四〉

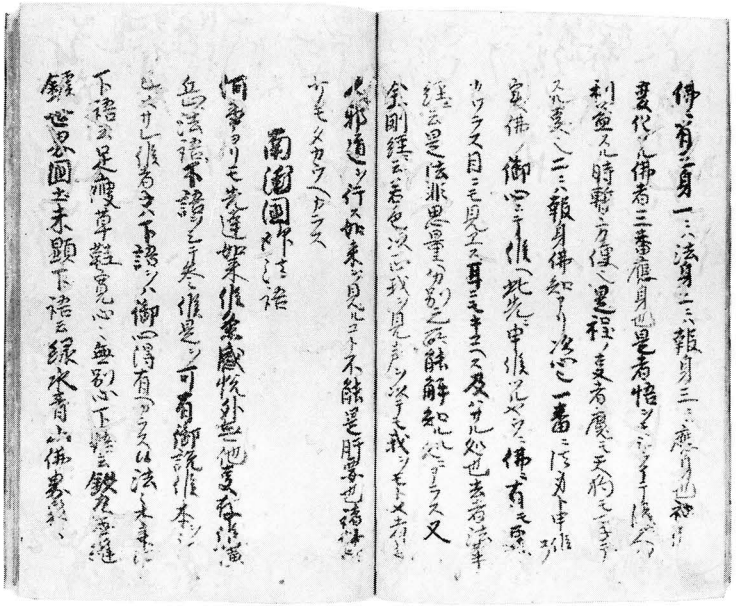
円爾弁円
室町時代写（片仮名交り）
一冊
内題「仮名法語」
外題「聖一仮名法語　全」
袋綴じ・薄茶色無地紙表紙
二五・五×一七・四糎
無界・八行　三六丁
「御本」印記

聖一国師の法語を抄録したもの。ほかに、大応国師〔南浦紹明。一二三五―一三〇八。崇福寺および鎌倉五山の万寿寺・建長寺などに住し、尾張国妙興寺（一宮市）を開いた〕および大燈国師〔宗峰妙超。一二八二―一三三七、大徳寺の開祖〕の法語をも併録している。

著者（聖一国師・一二〇二―八〇）は、鎌倉時代の禅僧。字は円爾弁円。駿河国安倍郡藁科に生まれる。円城寺・東大寺などで修行し、嘉禎二年（一二三六）入宋、帰国後、筑前国太宰府に崇福寺を開き、建長六



頭巻



本　　文

年（一二五四）、寿福寺（鎌倉五山の一つ）に住して、時の執権北条時頼のために仏法を説いた。翌年、東福寺（京都五山の一つ）を創立するなど、その宗教活動は、関東から九州まで広くおよんでいる。なお、聖一国師の称号は、わが国最初の国師号で、のち、更に、大宝鑑広照国師・神光国師の号をおくられた。

著書には、本書のほか「聖一国師語録」「大日経見聞」「十宗要通記」などがある。

▽参考　本書は江戸初期（正保・慶安年間）に版本として流布し、のち、文政年間にも刊行されたが、室町時代の古写本は極めて少ない。

大応国師の語録は、応安五年（一三七二）以来、たびたび刊行され、大燈国師の語録も、江戸中期、白隠によって公けにされている。

二一、東福開山聖一国師年譜　〈一〇四―四二〉

鉄牛円心編

一冊

室町時代写（朱・墨両点入り）

内題「東福開山聖一国師年譜」

外題「聖一国師年譜　全」

袋綴じ・茶色無地紙表紙

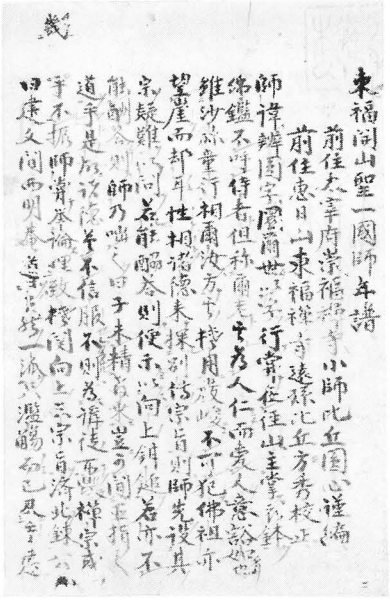
二四・五×一六・七糎

無界・一二行

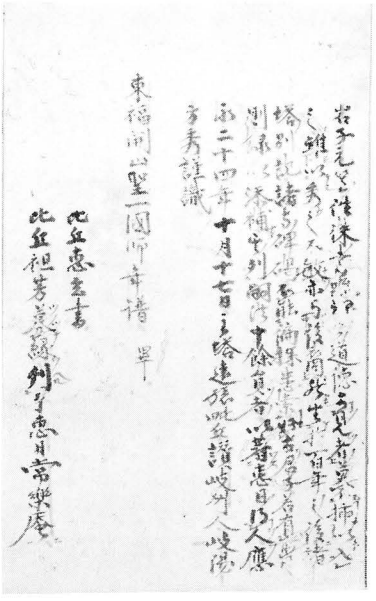
四一丁

刊記（巻首）前住太宰府崇福禅寺小師比丘円心謹編

前住恵日山東福禅寺遠孫比丘方秀校正



巻頭



奥書

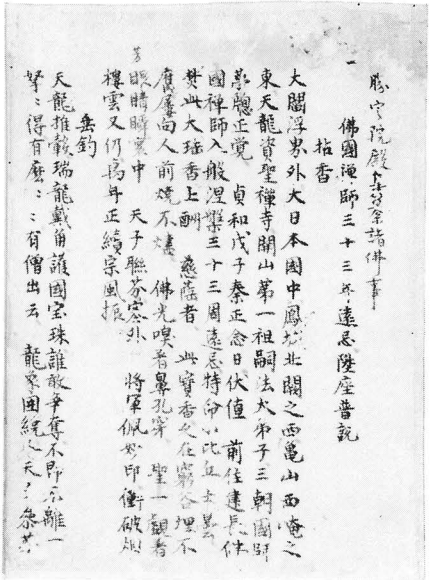
奥書　応永二十四年（一四一七）十月十七日主塔遠総
　　毗丘讃岐州人岐陽方秀謹識
　　比丘恵玄書
　　比丘祖芳募縁刊二于恵日常楽庵一
「御本」印記

京都東福寺の開山聖一国師の年譜で、建仁二年（一二〇二）から弘安三年（一二八〇）まで、七十八年の生涯を漢文で記したもので、応永二四年（一四一七）の五山版がもとになっている。巻末に、本朝名藍・元亨釈書巻第一の抄録・東福寺常楽庵檀那石塔図・東福寺檀那相続次第を付載。

編者は鎌倉末期―室町初期の禅僧。（聖一国師が開いた筑前国太宰府崇福寺の住職）

二三、勝定院殿集纂諸仏事　〈一〇四―六六〉

一冊
室町時代写（朱点入り）
内題「勝定院殿集纂諸仏事」
外題「勝定院殿集纂諸仏事　全」
袋綴じ・茶色無地紙表紙
二六×二〇・五ｾﾝﾁ
無界・一四行（注双行）
八八丁
巻首　「諸仏事目録」に、仏事の対象の人物（法号）と録上者名を記す。
奥書　応永癸巳（一四一三）七月十九日　周伸書
「御本」印記



頭巻

足利四代将軍義持（一三八六―一四二八。法号・勝定院）の治世（応永年間・室町初期）における諸仏事を集録したもの。前三代の将軍（尊氏・義詮・義持）はじめ生母勝鬘院および足利氏一族や縁故のある僧侶などの年忌法要に関する記事・仏語などを収め、義持自身の逆修（生存中の法事）もたびたび行なわれている。本書の伝存は極めて稀で、義持を中心とする室町初期の根本史料の一つである。編者未詳。

二三、横川拈香

〈一〇四―七〇〉

横川景三

一冊

天正一四年（一五八六）写（朱点入り）

外題「横川拈香　全」

袋綴じ・薄茶色無地紙表紙

二五・五×一九・八㌢

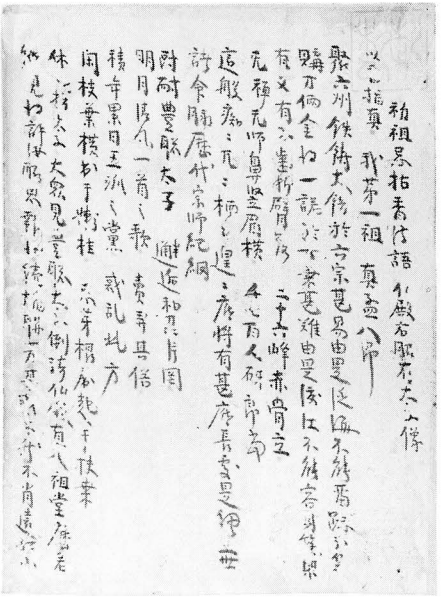
無界・一四行

五八丁

奥書　天正拾四丙戌小春念二　於北山鹿苑寺書焉

景鷲拝

「御本」印記

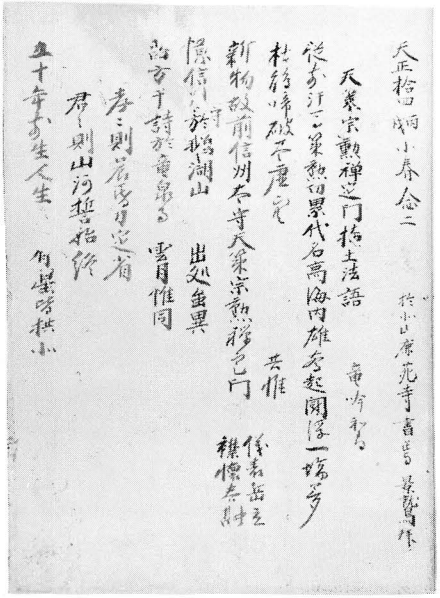


巻　頭

文明年間（一四六九―八六）における諸仏事や景三の拈香文（死者に対する哀悼のことば）などを集めたもので、足利将軍や室町時代の武将・僧侶などの年忌仏事に関する法語が多い。本書も伝存の少ない稀本である。

著者横川景三（おうせん・けいさん。一四二九―九二）は室町前期の禅僧。文明一三年（一四八一）足利義政に招かれて、足利氏の菩提寺等持院の住職となり、また、相国寺（京都五山の一つ）や南禅寺にも住した。瑞渓周鳳・希世霊彦などに学び、詩文にすぐれていた。

著書には、ほかに「京華集」「東遊集」などがある。



奥　書

二四、毛詩抄

〈一〇一―三七〉

二〇巻・一〇冊

慶長年間写（片仮名交り・朱点入り）

外題「毛詩抄　序・自一至二」（題簽　松平君山筆）

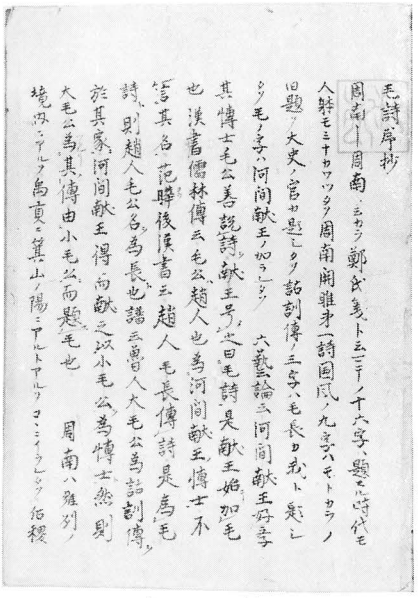
表紙「題簽」下に冊数を示す数字「一―十」まであり。所収巻数は、

一―「序・自一至二」　二―「三」　三―「四」　四―「自五至六」　五―「自七至八」　六―「自九至十一」　七―「自十二至十四」　八―「自十五至十七」　九―「十八」　十―「自十九至二十」

袋綴じ・薄青色無地紙表紙

二六・五×二〇糎

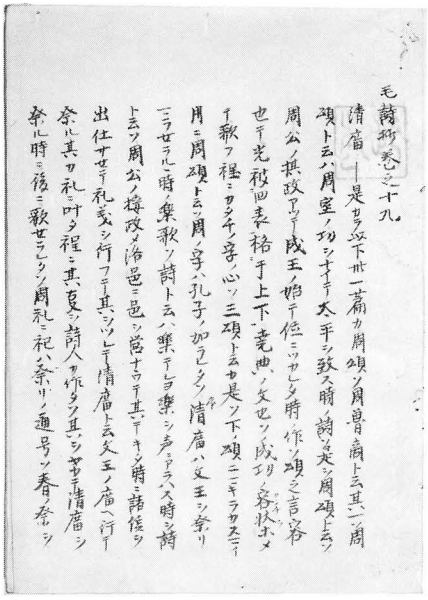
無界・一二行



毛詩序抄

周南　周南　三カウノ鄭氏ヲ上ニテ一ノ十六字、題ニ時代モ人特モニナカツタノ周南閑雅才（詩國風、九字ハモトカラノ題ノ大史官カ題ニタノ詔制傳ノ三字、毛長カ我ト題ニタノ毛ノ字ハ河間獻王ノ加ラニタノ　六藝論ニ河間獻王好学其傳士毛公善說詩獻王号之田毛詩是獻王始加毛也漢書儒林傳ニ毛公趙人也為河間獻王博士不管其名范曄後漢書ニ趙人毛長傳詩是為毛詩、則趙人毛公名為長也譜云魯人大毛公為詁訓傳於其家河間獻王得而獻之以小毛公為博士然則大毛公為其傳由小毛公而題毛也　周南ハ雅列ノ境内ニアルノ為貢ニ箕山ノ陽ニアルトアルノコトニイフニタノ伯稷

序　抄



毛詩抄　巻之十九

清廟　是カラ以下此一篇カ周頌ノ周曾商ト云其二ノ周頌ト云ハ周室ノ功シナテ太平ニ致ス時詩ヲ是ノ周頌ニタノ周公ノ摂政アテ成王ノ始テ位ニツカレタ時作ノ頌之言容也テ光被四表格于上下、堯典ノ文也ノ成功ノ容狀ホメテ歌フ程ニカクテ幸ノ心ノ三頌ト云カ是ノ下ノ頌ニモキラカスニテ用ニ周頌ト云ノ字ハ孔子ノ加ラレタノ清廟ハ文王ヲ祭リニラセラレ時ノ樂歌ノ詩ト云ハ樂テヲ樂シ声ニアラハス時ノ詩ト云ノ周公ノ摂政メ洛邑ニ邑ヲ営ナウテ其ヲキノ時ニ諸侯ノ出仕サセテ礼義シ行フテ其ツヒテ清廟ト云文王ノ廟ニ行テ奈ル其カ礼ニ叶タ程ニ其、夏ノ詩人ノ作タノ其シ祭ヲ清廟ノ祭ル時ニ後ニ歌セラレノ周礼ノ祀ノ祭リノ通号ノ春祭シ

巻　頭（巻十九）

一―一二五丁　二―五一丁　三―四三丁　四―七四丁
五―四四丁　六―六〇丁　七―八〇丁　八―一〇四丁
九―五四丁　十―七四丁
序抄　「毛詩」の序について、考証・解説している。
「御本」印記

中国最高の古典である「五経」（易・詩・書・礼記・春秋）のうち、文学方面を代表する「詩経」（毛家に伝存したので「毛詩」とも呼ばれる）の注釈書。俗語をまじえた和文で、講義筆記風に記されており、いわゆる「抄物（しょうもの）」の一つである。著者は未詳。

○毛詩注釈

毛詩　（漢）鄭玄箋　室町中期写　二〇巻七冊
駿河御譲本　〈一〇一―二三〉

毛詩草木鳥獣虫魚疏（晋）陸璣　松平君山筆
一冊　〈一二―九三〉

毛詩注疏〈付釈音〉（漢）鄭玄註・孔頴達疏
室町末期写　二〇巻九冊
駿河御譲本　〈一〇一―二九〉

毛詩補伝　仁井田好古　天保五年（一八三四）刊
三〇巻・首一巻　一六冊　〈五五―三九〉

毛詩品物図攷　岡元鳳　江戸末期写　七巻三冊
〈六三―六八〉

毛詩考　亀井昱（昭陽）　昭和九年影印　一一冊
〈六四―二五〉

▽参考　抄物。五山の学僧らによる古典の注釈・講義書。なお、この図録において「毛詩抄」以下におさめたものはすべて抄物であって、書写年代は、室町時代から慶長年間（江戸初期）にわたっている。

二五、論語聽塵

〈一〇一―二七〉

清原宣賢

一〇巻・五冊

天正一三年（一五八五）写

内題「論語聽塵　巻之一（―十）」

外題「論語秘抄一（―五）」（「一」のみ「論語秘抄聽塵一」とあり）

袋綴じ・茶色無地紙表紙

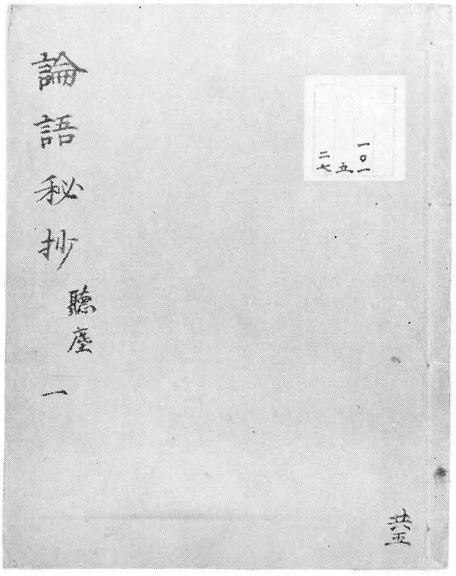
二五・九×二〇・四糎

無界・一六行

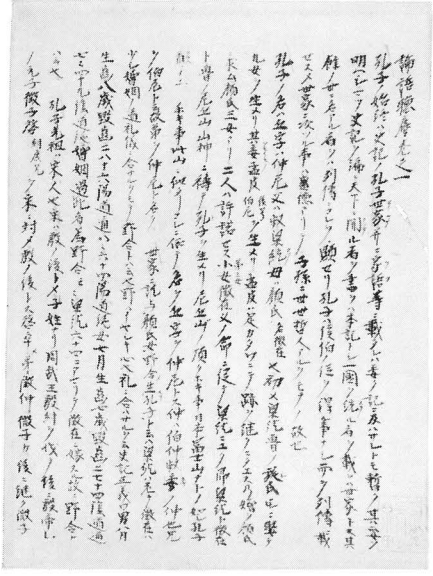
一―八四丁　二―六九丁　三―六〇丁　四―五六丁

五―四〇丁

奥書　右秘抄者吾祖環翠軒不出書也或人於予求講不能



表紙



巻頭

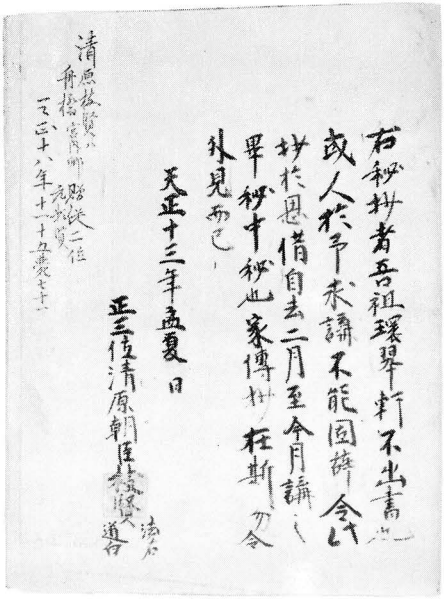
固辞令此抄於恩借自去二月至今月講之畢
秘中秘也家伝抄在斯勿令外見而已
天正十三年孟夏日
正三位　清原朝臣枝賢　法名道白（朱印）
（貼紙）
清原枝賢ハ舟橋宮内卿　贈従二位　元頼賢
天正十八年十一十五薨七十一
「御本」印記

「論語」の注釈書の一種。「論語」は、中国の古典のうち、最も早く日本に伝来し、その注釈も多いが、本書は、儒学を家学とする清原家の中でも、いわゆる清家（せいけ）点（清原学派による訓点）の大成者宣賢が、詳しい解説を述べたもの。片仮名交りの和文で記されている。宣賢については前出の「貞永式目抄」参照。

○論語注釈

論語精義　享保一四年（一七二九）刊　一〇巻一〇冊
蟹養斎・中村修旧蔵〈中―一四〇〉
尾崎良知旧蔵　〈三六―七〉

論語古訓　太宰純（春台）　元文四年（一七三九）刊
一〇巻五冊〈五四―二二〉


右秘抄者吾祖環翠軒不出書也
或人於予求講不能固辞令
抄於恩借自去二月至今月講
畢秘中秘也家傳抄在斯勿令
外見而已
天正十三年孟夏日
正三位清原朝臣枝賢　法名道白
清原枝賢ハ舟橋宮内卿　贈従二位　元頼賢
天正十八年十一十五薨七十一

奥書

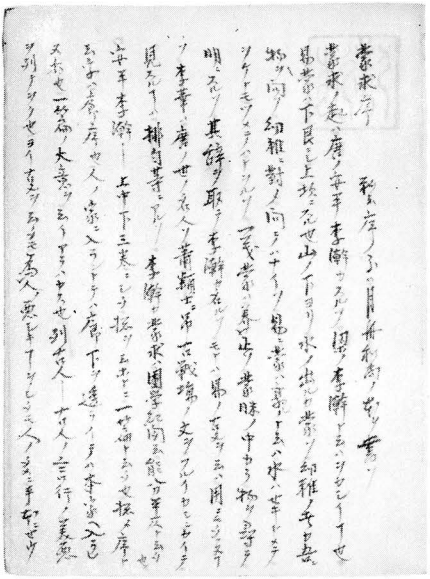
論語考　宇野鼎（明霞軒）寛延二年（一七四九）刊
三巻三冊〈五四―一六〉
論語衡　（『沢田眉山叢書　五』所収）
〈一四二―四七〉
論語群疑考　冢田大峰　文政五年（一八二二）刊
一〇巻一〇冊〈五四―一七〉
論語古義　伊藤維楨（仁斎）　文政一二年（一八二九）刊
一〇巻四冊〈五四―一八〉
論語古訓外伝　同　延享二年（一七四五）刊
二〇巻一〇冊〈五四―一四〉
論語徴集覧　松平頼寛編　宝暦一〇年（一七六〇）刊
二〇巻二〇冊〈五四―一五〉
同　二〇巻一〇冊〈五四―二〇〉

二六、蒙求抄　〈一〇一―三九〉

室町時代写（片仮名交り・朱点入り）
三冊
外題「蒙求抄」（題簽　松平君山筆）
袋綴じ・梨色無地紙表紙
二一・五×一六・三糎
無界・一二行
一―一一二丁・二―五二丁・三―六六丁
序抄　「蒙求」の成立や著者などについて説明。
「御本」印記

「蒙求」は、唐の李瀚（りかん）の著作で、中国古代の有名な人物の言行を、初学者の覚えやすいように、

表紙



巻頭

四字の韻語で記した修養書である。

わが国では、これの注釈書即ち「蒙求抄」が、中世までは写本、近世に入ってからは版本として広く読まれるようになった。

著者は未詳。

○諸本

蒙求（標題徐状元補注）（五代）李瀚（宋）徐子光
注・服部元喬校
寛政二年（一七九〇）刊
三巻三冊　〈六二―一〇五〉

蒙求校本（箋注）岡白駒注　明治四年（一八七一）刊
三巻三冊　〈六四―六九〉

蒙求箋注　写　三冊　中村修旧蔵
〈中―四七六〉

二七、古文真宝抄

〈一〇一―二五〉

二〇冊

室町時代写（片仮名交り・朱点入り）

内題「魁本大字諸儒箋解古文真宝」

外題「古文真宝抄」（題簽　松平君山筆）

袋綴じ・薄茶色無地紙表紙

二五・六×一九・四糎

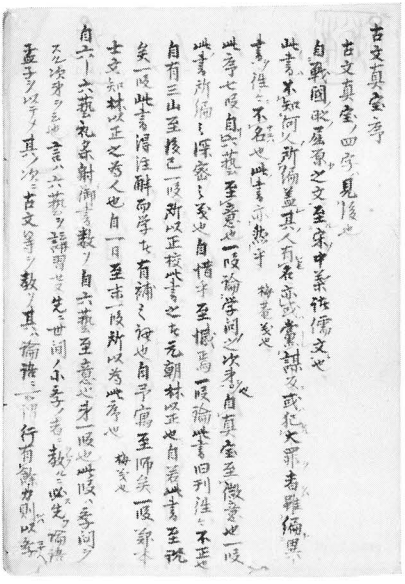
無界・一三行

一―五二丁　二―七〇丁　三―四三丁　四―三〇丁

五―三二丁　六―三〇丁　七―四一丁　八―四四丁

九―三五丁　十―三四丁　十一―三四丁　十二―二八丁　十三―三〇丁　十四―六一丁　十五―四八丁　十六―二九丁　十七―四七丁　十八―四六丁　十九―二五丁　二十―三一丁

表紙



巻頭

序抄　「古文真宝」の成立・構成、そのほか元朝世系などについて記す。

「御本」印記

「古文真宝」は、中国の古代（戦国時代〈BC四世紀ごろ〉）から宋代までの詩文を集めたもの（編者不詳）で、前・後両集にわかれ、前集には詩を、後集には文をおさめている。わが国でも、中世以来、五山文学者などの間で重んじられ、笑雲清三らの手に成る同名の注釈書も少なくない。

本書は、湖月和尚（後出五六頁）ほか、諸家の解説をまとめた古写本で、抄物（前出）の一つ。

著者は未詳。

二八、聽松和尚三体詩之抄　〈一〇一―二〇〉

希世霊彦

二冊

室町時代写（片仮名交り・朱点入り）

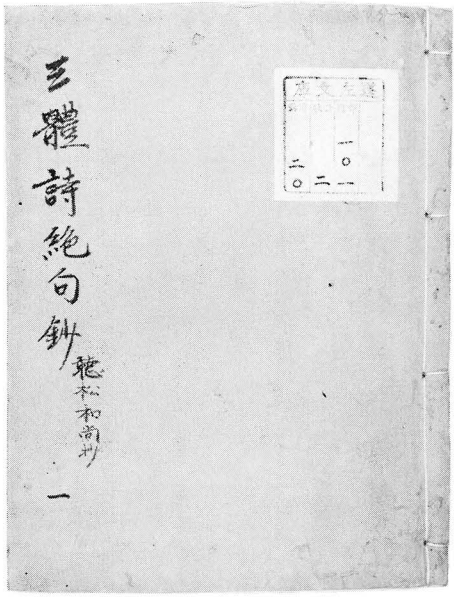
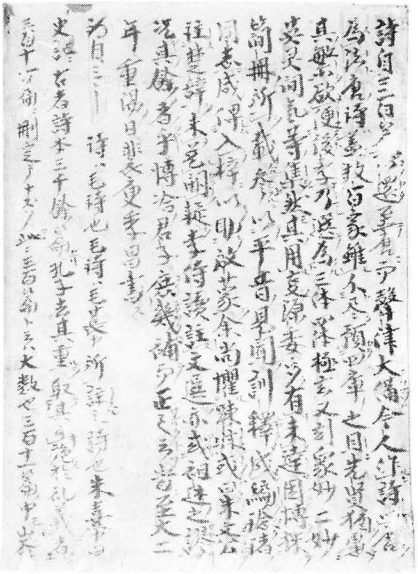
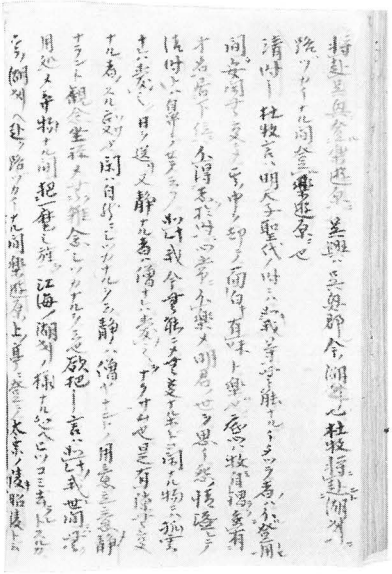


表　紙



巻　頭



本　文

外題「三体詩絶句抄聽松和尚抄一（一―二）」
袋綴じ・薄茶色無地紙表紙
二一・五×一六・三糎
無界・一二行　一―一〇一丁　二―七三丁
「御本」印記

「三体詩」（「三体唐詩」が正称。唐代の詩を、七言絶句・七言律詩・五言律詩の三体にわけて編集したもの）のうちの七言絶句（七言四句からなる詩）に注釈を加えた本。はじめに、漢詩についての概説がある。五山文学の隆盛にともない「三体詩」の注釈も多く作られたが、現存する室町時代の古写本はすくない。

著者希世（一四〇四―八八）は、室町前期の禅僧。京都南禅寺の聽松院に住したので聽松和尚と呼ばれた。村菴（そんあん）と号して、詩を善くし、五山文学者中の名家の一人である。

著書には「村菴稿」（別名「雪巣集」）「東坡詩抄」「蒲芽」（「蒲室集」の注釈書）などがある。

二九、東福寺湖月和尚三体詩之抄 〈一〇一―二一〉

湖月信鏡

三冊

室町時代写（朱・墨両点入り）

外題「簑庵剰穫　上（―中・下）」

袋綴じ・渋色無地紙表紙

二五・二×二〇・四糎

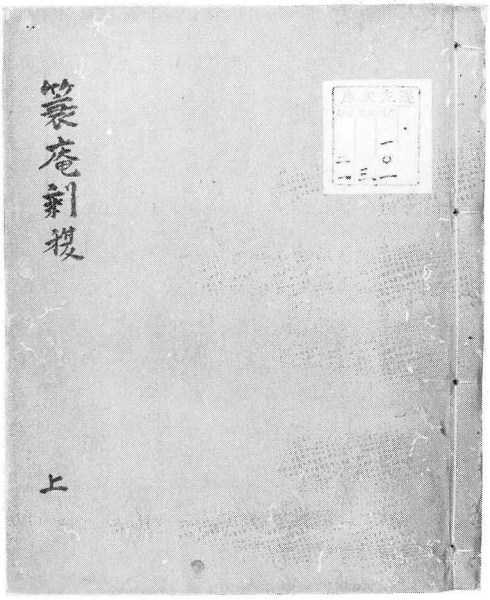
無界・一二行

上―一三三丁　中―九九丁　下―一三八丁

巻末「東福湖月和尚三体之抄　終」

巻末識語　湖月和尚勢州阿濃恵泉之僧東福入寺生縁ハ勢之楠（クス）人也号簑庵天下名緇也

「御本」印記

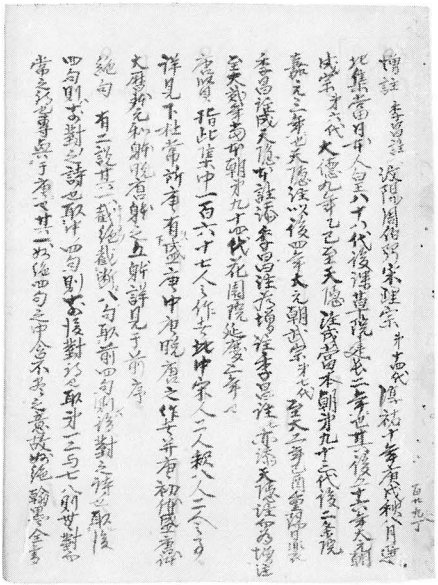


巻　頭

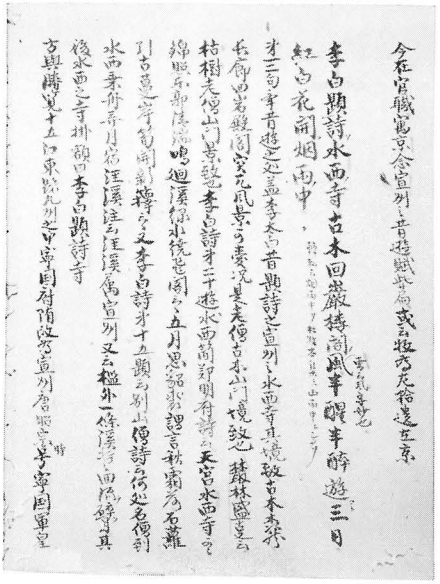
三体詩（前出「聴松和尚三体詩之抄」参照）の注釈書の一つで、大部分、漢文で記されている。七言絶句が多く、解説は詳密である。

巻首に「此抄者湖月之作也故ニ此抄ニ予トアルハ湖月ノ義也湖月ハ蘭坡ニ就テ三体之講□ラレタゾ」とある。

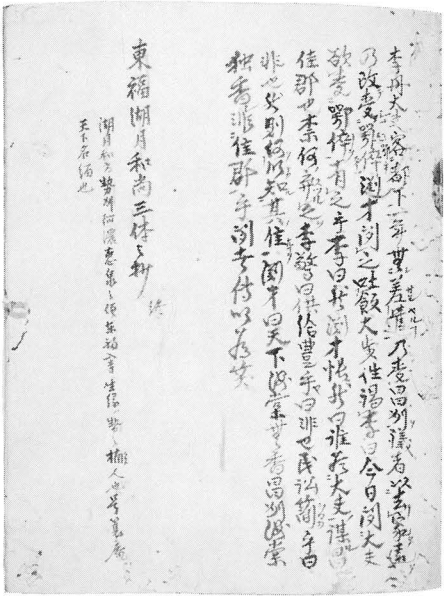
著者（一五三八没）は室町中期の禅僧。字は湖月。養庵（さあん・イすいあん）・楠渓・豊阜などと号し、京都東福寺に住した。詩文に長じ、また「古文真宝抄」（前出五三頁）など、漢詩文の注釈を多く著わしている。遺稿に「湖鏡集」がある。



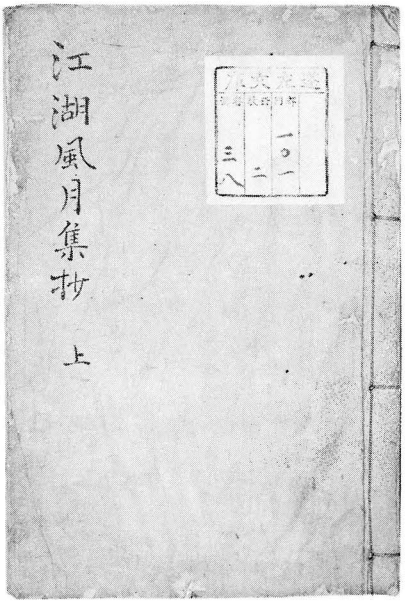
巻　頭



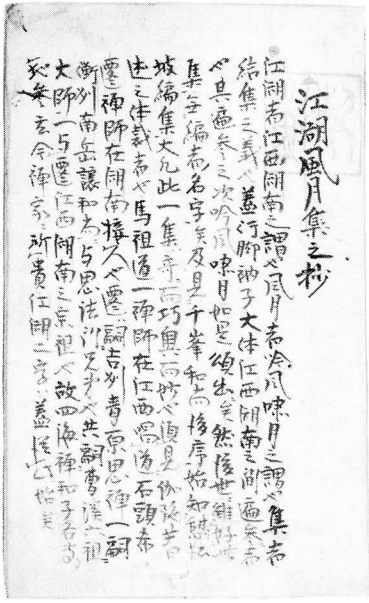
本　文



巻末識語



表紙



巻頭

三〇、江湖風月集抄　〈一〇一―三八〉

二冊

室町時代写（片仮名交り。一部朱・墨点入り）

内題「江湖風月集之抄」

外題「江湖風月集抄　上（下）」

袋綴じ・薄茶色無地紙表紙

一九・四×一二・八糎

無界・一二行

上―一二〇丁　下―一〇三丁

序　江湖者江西湖南之謂也風月者吟風嘯月之謂也集者結集之義也蓋行脚衲子大体江西湖南之間遍参者也其遍参之次吟風嘯月如是頌出ス矣然後世ニ雖好ニ此集ニ無ニ編者名字一矣及レ見ニ千峯和尚後序一始知ニ

憩松坡編集一大凡此一集奇而巧奥而妙也（以下略）

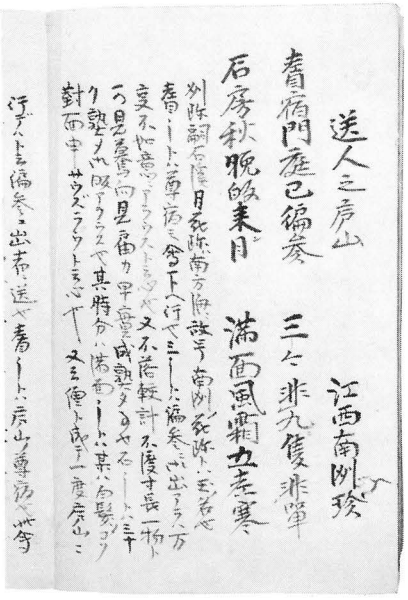
跋（下巻末）

此集者炎宋景定咸淳逮大元至治延祐諸方尊宿所作偈頌也宋末景定咸淳之時穿鑿過度殊失醇厚之風然有繩尺可為初学取則既知法則然後弃之勿執其法如世良精妙入神大巧若拙但信乎方円不レ存二規矩一其庶幾乎学者宜自択焉

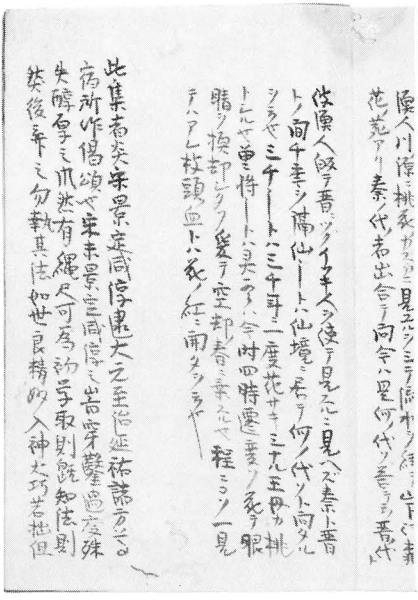
「御本」印記

宋・元代の諸仏家の詩集（憩松坡編）から、七言絶句二百六十余首を選んで、詳しい解説を加えたもの。

本書編さんの来由については、前項の序に示されているように「江湖は、江西・湖南、風月は、吟風嘯月の謂也、集は、結集の義也(云々)」「後世、此集を好むといへども、編者の名字無し、千峰和尚の後序を見るに及んで始めて、憩松坡編集を知る。大凡此一集、奇にして巧、奥にして妙也（下略）」などとあるところからも知ることができる。著者は未詳。



本文



跋

〈附一〉　名古屋市蓬左文庫蔵書概要

一、歴代藩主による集書

藩祖徳川義直は、父家康からゆずられた「駿河御譲本」三千冊をもとに、一万五千余冊を集めた。

二世光友の時には、更に数千冊を増し、万治元年（一六五八）には、専任の書物奉行がおかれた。

三世綱誠（つなな り）・四世吉通（よしみち）のころにも数千冊を加えた。綱誠夫人新子（瑩珠院）も、なかなかの愛書家で、奈良絵本の「つれづれ草」や「空穂物語」「しのびね物語」などの美本を集めている。

吉通の時代には、医学や兵学書に重点がおかれ、六世継友（つぐとも）のころには、国絵図などの地図類が多く作られた。

九世宗睦（むねちか）の時代に、藩校明倫堂がひらかれる（一七八三）と、そのテキストとして、漢籍が大量に集められ、明倫堂自らも「群書治要」をはじめたびたび漢籍を復刻し、江戸中期から末期にかけ、他藩をリードして刊行した。これが尾張明倫堂版である。

なお、書物奉行は、慶応三年（一八六七）三月までおかれ、二百二十年にわたり、文庫の図書・記録類を管理してきた。

二、重要文化財

本文庫所蔵の蔵書のうち、重要文化財の指定をうけているものは、つぎの七種一五四点である。

(1) 河内本・源氏物語　五十四巻　二十三冊
(2) 金沢文庫本・続日本紀　三十巻　三十軸
(3) 同　斉民要術　九巻　二十二軸
(4) 同　太平聖恵方　二十四冊
(5) 同　侍中群要　十巻　十軸
(6) 元応本・論語集解　十冊
(7) 高麗史節要　朝鮮古活字本　三十五巻　三十五冊

三、和　書

和書は、本文庫本の六半を占め、本集収載の駿河御譲本をはじめ、各種の「源氏物語」「大鏡」（応永本）「増鏡」（同）「大和物語」（明応本）「空穂物語」「土左日記」（片仮名本）「東鑑」（平仮名本）「源平盛衰記」（慶長古写本）「つれづれ草」（奈良絵本）「万葉集」（平仮名本）「夢の通路物語」（孤本）「連歌延徳抄」「太田和泉守記」（各自筆本）などをはじめ、古代から近世にいたる各時代の史料・日記・物語・歌集・随筆、およびそれらの注釈書や法制・経済・美術・音楽・医学・地誌・有職故実・仏典など、各種の古写本・古刊本がある。

四、漢　籍

重要文化財「斉民要術」「太平聖恵方」を筆頭に、「春秋公羊伝」（単疏本）「論語纂図」（元版）「唐柳先生集」（正和本）「翰林珠玉」（元版）「全漢志伝」（明版）「大明律」（同）「鄖台志」（同）「警世通言」（同）などをはじめ、宋・元・明・清の各時代の古版あるいは鎌倉・室町時代の古写本として、経・史・子・集の四部門を通じ、広い範囲にわたり、全蔵書の約三十％を占めている。なお、漢籍に準ずるものとして、「治平要覧」「三国遺事」「楽学軌範」をはじめ、約千四百冊の朝鮮本があり、ほとんど駿河御譲本であるが、元和・寛永以後の集書も「高麗史節要」「国朝五礼儀」など、およそ二百冊に達する。百四十一部のうち写本は五部ほかはすべて刊本で、なかでも十五・六世紀（李朝初期）の古活字（銅活字）版が多く、これらは活字印刷史上、その発達の早さと版式の立派さにおいて、世界的といわれている。

五、蘭　書

江戸末期に至り、蘭学がおこると、当時の藩士上田仲敏・伊藤圭介などを中心に尾張洋学館が設けられた。そこには多くの蘭書がそなえられたが、その一部（地理・歴史・自然科学・兵学・語学書など数十冊）が本文庫に納められている。ほかに、十八世紀のアムステルダム版の古医書（伊藤圭介解説付）・ライデン版の「日本文典」（クルチウス著）や江戸・長崎・名古屋版の蘭書など合計百余点がある。

六、尾張資料

尾張の三大地誌である「張州府志」「張州雑志」「尾張志」や「金城温古録」「熱田祭奠年中行事図会」の原本をはじめ、名古屋開府から明治初期にいたるまでの尾張藩および藩士の記録類、堀杏庵・吉見幸和・蟹養斎・中村習斎・細野要斎・小寺玉晁・小田切春江など諸名家の自筆本や手沢本などのほか幕末・維新史料など、およそ一万点がある。

七、古　絵　図

各国絵図・都市図・城郭図・邸宅庭園図などが多いが、名古屋および尾張地方の古絵図は、ことに豊富で、江戸前・後期の名古屋城二之丸庭園の原図など貴重なものを含み、総数二千数百枚におよんでいる。

八、古　文　書

本文庫所蔵の代表的な古文書群として、「美濃高木文書」約二千点がある。これは、西美濃（岐阜県養老郡地方）の一部を領し、幕府の交代寄合衆を勤めた高木家の公私にわたる記録・文書類である。

このほか、尾州茶屋文書およそ百四十点、犬山藩士であった八木雕の関係資料「八木文書」およそ約五百冊、有職故実関係の資料として「大炊御門（おおいみかど）家文書」およそ千冊余を所蔵している。

九、特殊コレクション

旧藩士や縁故者などの蔵書の寄贈や献本も多く、これには旧蔵者の名を冠し記念している。神村家（正鄰・忠貞）本（国学）・松平君山本（漢詩文集・雑録）・近松茂矩本（兵学）奥村得義本（尾張史料）・水野正信本（尾張資料・外国およ

び蝦夷関係資料）・本市初代市長中村修本（漢籍・尾張史料）・五味末吉本（武芸・有職故実）・本市七代市長阪本鈔之助本（明治・大正諸名士の漢詩文集）・藩校明倫堂旧蔵書（明・清版・明倫堂版の漢籍）などがあり、約一万点におよんでいるが、近年、さらに、江戸文学及び浮世絵の研究家として著名な尾崎久弥氏の旧蔵資料（「尾崎コレクション」）およそ一万五千点の寄贈を受けた。

十、一般図書

本文庫の蔵書は、以上のように、和漢の古典籍・郷土資料・古絵図・古文書などを主とするが、これらのほかに明治以後の一般図書も三千冊を数える。

書誌学・歴史・伝記・文学・郷土資料類が多いが、社会科学・自然科学関係のものもある。

十一、委託資料

江戸末期の名古屋の国学者山田千嘯（ちうね）の旧蔵書中、郷土資料など二百七十四点を、その子孫京都の山田氏から委託されている。

〈附二〉 名古屋市蓬左文庫略年表

文禄四年（一五九五）	徳川家康、このころより図書の収集につとめる。
慶長四―一一年（一五九九―一六〇六）	このころ、家康さかんに伏見版（木活字版）を刊行。
慶長一三―一九年（一六〇八～一四）	家康、駿府（静岡市）に退隠後、さかんに書籍を集めて「駿河文庫」を作り、また、大須真福寺文庫を名古屋城下に移す。
元和元年（一六一五）	七月　徳川義直、大坂の陣の帰途、京都において和漢書を多数購入する。
元和二年（一六一六）	家康、前年より駿河版（銅活字版）を刊行。 四月、徳川家康死去。
元和三年（一六一七）	十月、家康の旧蔵書（駿河文庫本）を遺言により、尾張・紀州・水戸の三家に分譲する。 一月七日、駿河御譲本三百七十七部二千八百三十九冊名古屋に到着、義直これを基として文庫を名古屋城二之丸に設ける。
元和四年（一六一八）	「源平盛衰記」等購入。
元和五年（一六一九）	「蔵書目録」編集。
元和八年（一六二二）	義直、儒者堀杏庵を浅野家より招いて学ぶ。
元和―寛永	このころ、義直さかんに書籍を集める。
寛永六年（一六二九）	十二月、林羅山、名古屋城を訪ね、文庫を視る。
寛永一二年（一六三五）	このころ、柴田勝家の遺臣種村肖推寺、蔵書五十余部を献本。
慶安四年（一六五一）	義直の蔵書目録を編集（総数一万五千余冊）
万治元年（一六五八）	二世光友、はじめて書物奉行をおく。
宝永年間（一七〇四―一〇）	このころ、四世吉通、医書・兵書などを多く集める。
正徳三年―享保年間（一七一三―三五）	このころ、六世継友、地図類を集める。

寛保三年（一七四三）	松平君山（秀雲）、書物奉行となる。
天明二年（一七八二）	書物奉行河村秀穎（秀根の兄）、文庫の蔵書目録を編集。
寛政八年（一七九六）	書物奉行庵原新九郎、蔵書目録を改修。
文政三年（一八二〇）	中村直斎（政方）、書物奉行となる。
文政四年（一八二一）	尾張藩、大須真福寺文庫の蔵書を修理。
文政七年（一八二四）	十一月、樋口好古、書物奉行となる。
天保年間（一八三〇―四三）	深田香実（正韶）、書物奉行となる。
安政六年（一八五九）	冢田謙堂（大峰の養子）、書物奉行となる。
慶応三年（一八六七）	三月、書物奉行を廃し、蔵書を主として藩校明倫堂に移す。
明治五年（一八七二）	文庫の蔵書の一部、売りはらわれる。
明治―大正年間	文庫の蔵書、主として東区大曽根（現徳川町）の徳川邸に保管。
大正元年（一九一二）	このころ、徳川義親氏により「蓬左文庫」と命名。
大正二年（一九一三）	「蓬左文庫図書目録」（植松安編）はじめて印刷される。
昭和六年（一九三一）	財団法人尾張徳川黎明会設立趣意書発表。
昭和七年（一九三二）	四月、財団法人尾張徳川黎明会（会長徳川義親）設立、蓬左文庫・徳川美術館などを併せて運営。
昭昭八年（一九三三）	五月、東京市豊島区目白三丁目に文庫新築起工。
昭和九年（一九三四）	一月、文庫の新築成る。
昭和一〇年（一九三五）	文庫の蔵書を名古屋より東京へ移す。
	十一月十日、蓬左文庫開館。
昭和一九年（一九四四）	十一月三十日、蔵書の一部を展示し、開館披露を行なう。
昭和二一年（一九四六）	文庫の貴重図書を長野県に疎開。
	貴重図書を疎開先より東京へ返送。

昭和二五年（一九五〇）　財団法人名を黎明会と改称。
二月、蓬左文庫購入について、名古屋市と財団法人黎明会と覚書を交換。
三月、塚本三市長「蓬左文庫購入に関する議案」を市会に呈出。
昭和二六年（一九五一）　四月、塚本市長と黎明会々長徳川義知氏との間で購入契約行なわれる。
九月、蓬左文庫蔵書、名古屋（大曽根駅）に到着、東区徳川町の現書庫に収納。
二月十七日、蓬左文庫特別展示会を徳川美術館において開催（―二十一日）。
昭和二七年（一九五二）　十一月一日、東区徳川町において一般公開はじまる。
昭和二九年（一九五四）　名古屋市蓬左文庫閲覧規則（教育委員会規則第六号）制定、施行。
「蓬左文庫貴重図書仮目録」（謄写版）刊行。
一月、蓬左文庫蔵書、重要文化財指定申請選考会開催。
三月、「河内本源氏物語」金沢文庫本「続日本紀」「侍中群要」「斉民要術」の四種、重要文化財の指定をうける。
昭和三〇年（一九五五）　「蓬左文庫漢籍目録」（謄写版）刊行。
六月、「太平聖恵方」「論語集解」の二種、重要文化財の指定をうける。
昭和三一年（一九五六）　「蓬左文庫国書目録　文学・語学・歴史・伝記之部」刊行。
昭和三二年（一九五七）　市文化財調査保存委員会より「蓬左文庫主要図書解説」（文化財叢書第十一号）刊行。
昭和三四年（一九五九）　九月「名古屋叢書」（第一期・二十五巻）第一回配本・地理編（一）刊行。
昭和三五年（一九六〇）　「蓬左文庫国書目録　地誌之部」刊行。
昭和三六年（一九六一）　六月、社会教育課より鶴舞図書館（現―鶴舞中央図書館）へ移管、その分館となる。
昭和三七年（一九六二）　三月、「駿河御譲本目録」刊行。
「山田千嚮旧蔵書」山田一夫氏より寄託。
昭和三八年（一九六三）　三月、「名古屋叢書」終了。
九月、「名古屋叢書続編」（第二期・二十巻）第一巻刊行。

十一月一日「蓬左文庫重要文化財展」（鶴舞図書館開館四十周年記念）名古屋城において開催。（―三十日）

昭和四〇年（一九六五）

二月、名古屋市東図書館（蓬左文庫館舎を含む）新築起工。

七月一日、新館舎において開館。展示室を設ける。

昭和四一年（一九六六）

四月、「名古屋市蓬左文庫条例」「名古屋市蓬左文庫利用規則」「名古屋市蓬左文庫処務規則」制定。博物館の事業に類する事業を行なう施設となる。

はじめて文庫長（鶴舞中央図書館長兼任）をおく。

十月、重要文化財のマイクロ撮影を行なう。（以後、重要資料のマイクロ撮影続行）。

十一月一日、開館十五周年記念「蓬左文庫重要文化財展」を開催（―二十三日）。

一月、第十三回文化財防火デーにちなみ、第一回消防訓練を行なう。

昭和四二年（一九六七）

三月、書庫に不燃性ガス消火装置（炭酸ガス式）設備をほどこす。

三月、「善本解題図録・第一集」刊行。

昭和四三年（一九六八）

三月、「善本解題図録・第二集」刊行。

「駿河御譲本目録」再版。

「尾州茶屋文書」中島建次郎氏より受贈。

「名古屋叢書続編」刊行終了。

昭和四四年（一九六九）

十二月、「名古屋叢書続編・総目録」刊行。

昭和四五年（一九七〇）

十二月、「古絵図目録」刊行。

昭和四六年（一九七一）

三月、「善本解題図録・第三集」刊行。

昭和四七年（一九七二）

三月、「名古屋叢書続編・索引」刊行。

社会教育部文化課長が文庫長を兼任。

「尾崎久弥コレクション」尾崎千代野氏より受贈。

昭和四八年（一九七三）

六月、「尾崎久弥コレクション展を名古屋城および文庫において開催。

昭和五〇年（一九七五）　三月、「漢籍分類目録」刊行。
「小酒井不木文庫」小酒井ひさゑ氏より受贈。
六月、「高麗史節要」重要文化財の指定を受ける。
昭和五一年（一九七六）　三月、「国書分類目録」刊行。
十二月、「古文書古絵図目録」刊行。
昭和五二年（一九七七）　二月、「尾崎久弥コレクション目録・第一集」刊行。
九月、「重要文化財図録」再版。
昭和五三年（一九七八）　一月、「名古屋叢書索引」刊行。
四月、名古屋市博物館副館長が文庫長を兼任。
十月、名古屋市博物館の分館となる。
昭和五四年（一九七九）　三月、「尾崎久弥コレクション目録・第二集」刊行。
昭和五五年（一九八〇）　一月、「尾崎久弥コレクション目録・第三集」刊行。
四月、「名古屋叢書三編」の編集開始。

昭和五十五年八月十五日印刷
昭和五十五年八月二十日発行（改訂再版）

編集
発行　名古屋市蓬左文庫
名古屋市東区徳川町二の二七

印刷　大同印刷株式会社
名古屋市東区泉三丁目三―一六

有料　一、〇〇〇部（一五〇円）